

青藍会会報

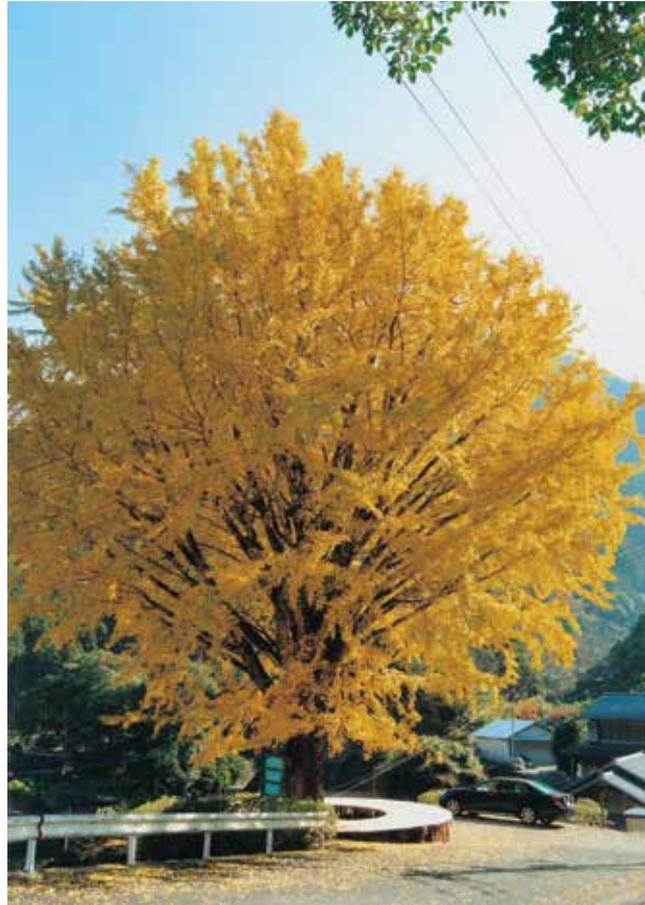
第104号

令和6年12月



徳島大学医学部医学科同窓会

相模女子大学栄養科学部健康栄養学科教授
相模女子大学副学長 奥村裕司



満月イチョウ (神山町)

撮影 手束昭胤 (医学部11期)

2024年度 青藍会賞募集

青藍会では学術研究の発展と奨励のために
青藍会賞を設けています。

若手研究者の応募をお待ちしています!!



応募締切 2025年1月14日 (火)

詳細は27ページをご覧ください

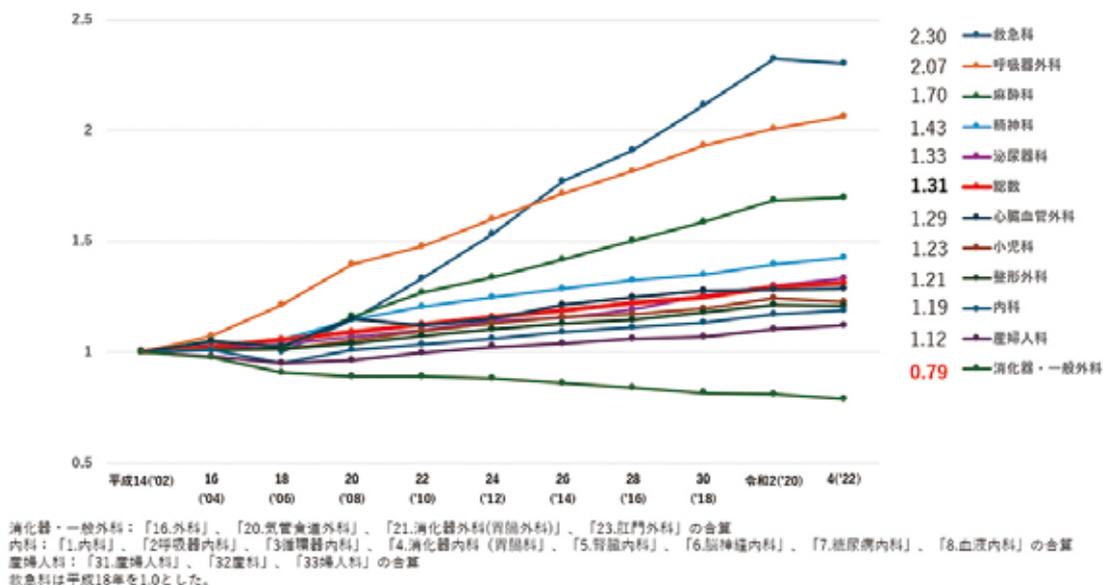
消化器外科医の現状と未来

岡山支部長

浦上 淳 (医学部33期)

私は学生時代、お世辞にも出来の良い学生ではなく、再試験の常連で、部活動も頑張ったということもなく、ただただ周りの友人たちに助けられて卒業できました。その様な私が巻頭言を書かせていただくのものはなはだ烏滸がましいのですが、青藍会の皆様、特に外科以外の先生方に消化器外科医の現状について、ぜひ知っておいていただきたいと思い、筆をとりました。

私は1987年に卒業後、30年以上消化器外科医として働いてきました。皆様に知っていただきたいことは、消化器外科医が減っているという事です。これについては日本消化器外科学会も大きな問題として、「地域における消化器外科の診療体制維持のために必要な待遇改善について、ご理解と後押しをお願いします」という提言を公表しています。その中から抜粋して消化器外科医減少の状況をお伝えします。約20年前の2002年と比較して、2022年の消化器・一般外科医師数は2割以上も減っています(厚生労働省のグラフ参照)。



これは、医師の総数が20年間で3割以上増えている中での推移であり、そして消化器外科医の業務量が以前と比べ増えている中での状況です。他の診療科と比較すると、同じ外科系である呼吸器外科、心臓血管外科、泌尿器科、産婦人科などは一律に増加傾向なのに対し、消化器・一般外科は唯一減少している診療科なのです。この事実は、消化器・一般外科の業務がとりわけ負担が大きく、診療科の選択として研修医から敬遠されてきたことを示しています。特に地方都市では、消化器外科医は手術のみならず、救急対応、化学療法、終末期医療、検診業

務、ICU 管理など多くの非外科診療を担っているのが現状です。従って消化器外科医は急速に減少し、10年後には現在の4分の3に、20年後には現在の半分にまで減少すると予想されています。今後、青藍会の皆様の周辺でも不都合なことが起こる可能性もあります。

学会ではいかに業務を効率化するか、タスクシフトするか、いかに消化器外科医を増やすか、などがテーマとして取り上げられますが、今のところ有効な方策はないようです。緊急手術に対するインセンティブの導入や基本給与の向上などもはたらきかけているようです。私の職場でも働き方改革が導入され勤務時間を計測してはいますが、人員の少ない科では時間外業務は減りそうにありません。また手術支援ロボットや AI 技術を活かしたツールや機器の開発導入が期待されていますが、消化器外科の日常業務を減らすにはまだ程遠いのが現状です。その一方では病院の経営上、なるべく手術数を増やすこと、救急疾患を断らないことなどが求められているのも事実です。

この状況が続くと、近い将来、地域における消化器外科の診療体制の維持が困難になると予想されています。特に消化器癌の手術が、消化器外科医不足のためにすぐに行うことができなくなります。また緊急手術が必要な消化器外科疾患（消化管穿孔、腸閉塞、腹膜炎など）については、時間外の患者の受け入れが難しくなり、大きな病院でも即座に緊急手術ができない状況がすでに生まれています。この消化器外科医不足に対して、今から改善のための対策を行っていかないと、将来は危機的な状況が予想されています。

私も学生の講義や実習、さらに研修医への教育の機会があります。その時に、外科に入ったら色々な臓器の手術ができて、やりがいのある科であるというように、以前は広く勧誘していましたが、最近では外科を志望する学生や研修医が減ってしまったため勧誘もしづらくなりました。決して、私の様な昭和の外科医の価値観を押し付けてはならないと思っています。有効な方策がない現状で私たちにできることは魅力ある組織づくりを行うことしかないと考えています。それは地道に外科チームとして良い仕事をして、組織内の人間関係を良好に保ち、学生や研修医に丁寧に手術を含めた診療を教えていくことです。そういう中から消化器外科医をめざす研修医が現れてくると信じています。2-3年でこの状況が大きく変わるとは思われませんが、個人の努力でどうこういう問題ではありません。私としては困難な状況の中でも、なるべく辞めることなく、今の仕事を継続していくしかないと考えています。

目次

○題 字	奥村裕司
○写真	手束昭胤
○2024年度青藍会賞募集	
○巻頭言	浦上 淳
○令和6年度青藍会総会（ハイブリッド開催）	1
青藍会会長挨拶	荒瀬誠治 1
医学部長挨拶	西岡安彦 2
議事要録	3
支部報告	4
青藍会会則	9
事業報告	11
会計報告	14
学術講演抄録	大日輝記 18 池田康将 21
2023年度青藍会賞選考過程について	久保宜明 23
2023年度青藍会賞受賞講演	佐藤正大 23
○2024年度青藍会賞募集	27
○医学科学生（総代副総代）との懇親会を開催しました	28
○第41回青藍会・医学科講演会を開催	森田彩夏 29 安藤佑真 29
○青藍会の助成活動	
徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告	大藤 純 31
○支部だより	
北海道支部	石丸裕晃 32
近畿支部	播村佳昭 32
香川支部	福田 洋 33
高知支部	中村章一郎 34
兵庫支部	小川達司 35
○会員通信	
重症細菌感染症と糖尿病	渡辺 罔 武 37
アートと主観的幸福感	板東 浩 38
卒後50周年記念事業	香川和夫 39
第20回同期会は横浜中華街にて	本田 壮一 40
医学部第40期 渡部豪先生「往診屋」出版記念同窓会	山田博胤 41
徳島大学医学部第17期生同窓会	松岡信夫 42
俳句	小谷雄二・零 俊一・駒木幹正・真鍋正広 45
○書籍紹介	
「往診屋 地域の患者の人生を診る365日」	渡部 豪 46
○徳島大学の動き	
徳島大学大学院医歯薬学研究部定年退任教授挨拶	佐々木 卓也 47
徳島大学大学院医歯薬学研究部新任教授紹介	血液・内分泌代謝内科学分野 松岡賢一 48 実践地域診療・医科学分野 中村信元 49 実践地域診療・医科学分野 西正暁 50 先端脳機能研究分野 森垣龍馬 51
徳島大学病院新任教授紹介	徳島大学病院情報センター 若田好史 52

○留 学 記

ドイツでの留学を通して	南 碧 乃	53
ハノーファー留学記	興 津 勇 紀	54
ヒューストンで学んだ2ヶ月間	岡 久 凜 香	55
ヒューストンで学ぶアカデミアの在り方	前 川 勇 輔	56
留学体験記 (サンパウロ大学)	岡 野 夏 奈	57

○第76回西日本医科学生総合体育大会の結果

2024年度第76回西日本医科学生総合体育大会 水泳部 優勝	水上競技部 富 岡 優	58
第76回西医体を終えて	弓道部 青 野 大 樹	59
第76回西医体を終えて	陸上競技部 山 本 大 心	60
第76回西日本医科学生総合体育大会 ゴルフ (女子) 競技部門 団体準優勝	柳 坂 圭 祐	61
ゴルフ部 利 川 杏 菜・廣 瀬 奈 巳・森 田 彩 夏・竹 内 百 佳		61
第76回西日本医科学生総合体育大会を終えて	軟式庭球部 林 優 太 朗	62
軟式庭球部 吉 川 和 輝・宮 本 幹 太・船 橋 光		62

○学 生 だ よ り

臨床への第一歩	天 野 利 哉	64
大学の研究室配属を通じて	小 林 由 紀 彦	64
最高のお祭り, 阿波踊り	豊 藏 太 一	65
Activities at FLS	大 西 健 斗	66
旋風巻き起こせ蔵本祭	久 次 米 太 陽	67

○青藍会の動き

教授就任のご挨拶	日本体育大学保健医療学部救急医療学科 増 野 智 彦	68
愛媛大学大学院医学系研究科先進消化器内視鏡開発学講座	森 宏 仁	69
病院長就任のご挨拶	四国こどもとおとなの医療センター 前 田 和 寿	70
青藍会人事 (評議員名簿・支部長名簿・役員名簿・委員会名簿)		71
会 員 の 異 動		76
物 故 者		78
青藍会会費納入状況		79
会費納入のお願い・会費の納入について・振り込みについてのお願い		80
事務局からのお願い		81

○投 稿 規 定 82

○編 集 後 記 原 田 和 代

★支部総会開催のお知らせ

各支部会員の先生方は奮ってご参加ください。

広島支部総会 令和7年1月25日(土) 18時 リーガロイヤルホテル広島にて
連絡先: j-hamawaki@hamawaki.or.jp

岡山支部総会 令和7年2月1日(土) 18時30分 ホテルグランヴィア岡山にて
連絡先: aurakami@med.kawasaki-m.ac.jp

会報第102号より「支部総会開催のお知らせ」を掲載いたしております。
支部総会開催のお日にちが確定しましたら青藍会事務局までお知らせください。

令和6年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

令和6年度青藍会総会は、ハイブリッドにて開催いたしました。総会当日の内容をご報告申し上げます。

I 開会宣言

副会長

大 申 文 隆（医学部24期）

ただいまから令和6年度青藍会総会を開催いたします。なお、本会は評議員会及び支部長会議もかねております。開会に当たりまして荒瀬会長からご挨拶を申し上げます。

II 会長挨拶

青藍会会長

荒 瀬 誠 治（医学部20期）

過酷な炎暑の中、青藍会総会のために参列していただき、また各地からリモートで参加いただき本当にありがとうございます。実は私は10日前にコロナが判明し、やっと3日前にドクターストップから戻った次第で、きちんとした挨拶を準備できません。今日は、ここ数年の青藍会の動きをパワーポイントの助けを借りて皆さんにお伝えすることで挨拶いたします。

思うに過去4年間、コロナの影響は凄まじかったです。大学では入学式、卒業式、講義室での講義や試験もなくなり、ポリクリ、ベッドサイドすら

が、画面とスピーカー相手のリモートとなりました。クラブも休止となり、西医体も中止、等々、学生同士、学生・諸先生方・先輩諸氏が集まり相対する fields がなくなったのです。昨年より大学生活はやっと face to face（普通）に戻り、学生間での同窓仲間を慈しみ、恩師ら先輩らに感謝しながら、医学部学生で過ごした充実感等が得られるようになったかなと感じています。大学や諸先生方の圧倒的な努力、学生自身の立ち向かってきた努力の甲斐あって、医学部学生としての思い出深き生活が送れる様になったと今は少し安堵しています。

私が就任した4年前には、桜井前会長らの努力により、青藍会の運営状況も安定し設立の趣旨に則っての行動ができる状況でした。ところが、コロナで青藍会自体が学生に相対する機会を全て失い、青藍会の姿を直接に伝え、そのあり方等に賛同を得る機会がなくなりました。そのままでは青藍会の存在すら忘れられると思い、できる機会を捉えては青藍会の趣旨内容を伝えると共に、卒業時の会費納入他のお願いをしてきました。ほとんどがズームでの画面を通じての話で、真意が伝わったとの実感はありませんでした。桜井会長の頃は90%近くあった卒業時の5年間会費一括納入率が、コロナ以後40%前後まで落ち込んだのです。それと期を同じくして、大学医学部自体ひいては青藍会に何の思いもなく、青藍会と連絡すら取ってくれない会員が増えたことが衝撃でした。

もちろんこの間、私たちは手をこまねいていたわけではなく、青藍会のあり方に賛同いただき、将来の active な会員を生み出すためにと、白衣・手術衣授与、学生時代に頑張って業績を残した学生への青藍会奨励賞、MD-PhD コース学生への奨励金・資金援助、海外留学支援等の学生支援、研究者支援等をしてきましたが、その事の意義や思いが学生の胸に刻まれなかったのです。悲しいことです。反対にうれしいことには、会員の研究業績を顕彰する「青藍会賞（賞金 100万円）」が、研究者の栄誉・実績につながると若手会員研究者に認識されるようになり申請者が増えました。また過去の青藍会賞受賞者から本学・他学の教授が次々と誕生しました。加えて受賞者の皆様がその後 active な青藍会会員となり、青藍会を次代に伝えようとしてくれた事もうれしい



荒瀬誠治会長挨拶

令和6年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

記念講演会では、特別講演1として徳島大学医学部29期の上田夏生香川大学長から「大学人としての歩みとこれからの大学」、特別講演2として徳島大学医学部36期の安友康二徳島大学副理事、生体防御医学分野教授から「徳島大学医学部で拓くサイエンス」と題してご講演をいただきました。上田学長からは、徳島大学医学部生化学講座時代が切欠で始まり、留学を経て教授として赴任した香川大学生化学講座でのカンナビド受容体研究へと続く脂質代謝研究について紹介いただくとともに、大学人として歩んでこられた香川大学医学部長や学長の視点から、今後の地方大学の課題と展望をご講演いただきました。安友副理事からは、これまで一貫して取り組んでこられた免疫系の維持・破綻機構に関する研究の2本柱「免疫難病の原因・病態研究」と「T細胞の分化調節機構に関する研究」の成果と展望についてご講演いただきました。

記念祝賀会は、赤池雅史医歯薬学研究部長（31期）のご挨拶に続き、齋藤義郎徳島県医師会長（16期）、北畑洋徳島県病院管理者（26期）、中村丁次公益財団法人日本栄養士会代表理事会長から来賓祝辞をいただき、香美祥二徳島大学病院長（26期）の乾杯のご発声で始まりしました。約100名の方々にご参加いただきました祝宴は、橋本一郎医学科長（34期）、二川健医学科栄養学科長（33期）、森健治保健学科長（30期）による学科紹介や、荒瀬誠治青藍会会長（20期）、津田とみ栄友会会長、久米博子睦眉会会長のスピーチで80年の歳月を懐かしく振り返ると共に、徳島大学栄養学連の素晴らしい阿波踊りで大いに盛り上がりました。

50周年以来となる実に30年ぶりの医学部周年記念会でしたが、たくさんの方々のご尽力ならびにご参加で、100周年に向けて大きなステップとなる盛大な中にも引き締まった80周年記念会が開催できました。同時に80周年記念事業として完成した記念誌「徳島大学医学部80年史」のご紹介と、進行中の教育・研究・学生支援事業についても簡単に触れさせていただきました。

記念会にご参加いただきました先生方ならびに80周年事業にご寄付を賜りました先生方には、改めて医学部を代表して心より御礼申し上げます。

IV 議事要録

- 1 日時 令和6年7月15日(月)10:30~16:00
- 2 場所 ハイブリッド開催(青藍会館大会議室)
- 3 出席者 44名(会場33名・リモート11名)
- 4 議題
 - (1) 青藍会会員の現状報告
大串副会長から青藍会会員の現状報告があり、黙祷が行われた。
正会員数6,635名(総会員数7,582名,物故会員数947名)教授就任5名,病院長就任3名,青藍会出身教授91名
 - (2) 青藍会会則の改正(案)
小西事務長から、会則第20条の改正案について説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。(10頁)
 - (3) 令和5年度青藍会事業報告(11頁)
 - (4) 令和5年度青藍会収支決算報告(案)
審議の結果、原案のとおり承認された。(14頁)
 - (5) 令和5年度医学部50周年記念事業募金会計決算報告(案)
審議の結果、原案のとおり承認された。
 - (6) 令和5年度青藍会運営費収支決算報告(案)
審議の結果、原案のとおり承認された。(16頁)
 - (7) 令和5年度監査報告(14頁・16頁)
 - (8) 令和6年度青藍会事業計画(案)
審議の結果、原案のとおり承認された。(13頁)
 - (9) 令和6年度青藍会収支予算(案)
審議の結果、原案のとおり承認された。(15頁)
 - (10) 令和6年度青藍会運営費収支予算(案)
審議の結果、原案のとおり承認された。(17頁)
 - (11) 名誉会員の推薦について
荒瀬会長から、平成12年に徳島大学教授医学部に就任され令和6年3月末に退任された佐々木卓也先生について、長年、教育・研究・診療において徳島大学及び青藍会に貢献されたので、名誉会員に推薦したいとの提案説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。
 - (12) 青藍会役員の改選について
審議の結果、原案のとおり承認された。
 - (13) 医学部創立80周年記念事業への寄付について
審議の結果、寄付協力について承認された。
 - (14) その他
太田房雄先生(医学部13期評議員)より、事務局の人件費について発言があった。

令和6年度青藍会総会（ハイブリッド開催）



ますと、600通以上の案内を送り、転居先不明で返されたのが90通あまり。同封した出席確認書で返事をいただいたのが60通弱でした。メールアドレスも記しましたが、これによる返信はわずかに5通。メールアドレスで会員への連絡の一助になる、との甘い考えでしたが、見事に期待外れでした。なんとかレスポンスの向上をはかりたいと思っています。



近畿支部報告（播村佳昭支部長）

等を使っている若い卒業生の先生方（30歳代、40歳代）に、総代や学年幹事を通じて、新しいツールを駆使してコンタクトを図って行くことを検討しています。また本部との連携をより密にして、支部同士の相互の繋がりも構築できるように、同窓会活動を行って行きたいと考えています。最後に、同窓会の皆さまのご活躍と、ご健康を心より祈念しています。

近畿支部

近畿支部長
播 村 佳 昭（医学部28期）

本年も総会に参加させていただき、懐かしい徳島を訪れることができました。

わたくしども近畿支部の報告ですが、行事と言えば昨年も支部会総会を開催したことにつきます。十人の参加者で、ささやかな規模です。今年も本日の総会出席報告を兼ねて、ちょうど一週間後に支部会をいたします。幸いにして昨年のお倍の先生方のご参加を得ることができそうです。例年、荒瀬会長には遠路来阪いただいております、この席を借りまして改めてお礼申し上げます。

さて、どの支部においても同じだと思いますが、会員への連絡が悩みの種であります。当支部で言い

兵庫支部

兵庫支部長
小 川 達 司（医学部31期）

7月15日海の日には総会で支部報告をしました。当日は31期の同級生が5名（赤池、安藤、小川、小木曾、葉久）出席しており、心強く思われました。植林（11期）先生より支部長を引き継ぎ2年目となります。5月12日に世話人会を三宮「第一樓」で行い、12名の参加がありました。その会で兵庫支部総会のプログラムを検討し、会計について確認を行いました。



兵庫支部報告（小川達司支部長）

令和6年度青藍会総会（ハイブリッド開催）

で支部活動を進めて頂きたいと思っています。

昭和44年卒業の頃は、医学部紛争の最中でしたが先輩、後輩との議論の中で医療のあり方、母校をいかにして良くしていくかなど議論した思い出があります。

医療技術に優れ、人間性豊かな医療人、研究者が育つように、同窓として今後も微力ではありますが頑張っていきたいと思っています。



愛媛支部報告（久野梧郎支部長）

九州支部

九州支部長

武井 実根雄（医学部27期）

今年の青藍会総会は久しぶりに現地参加させていただきました。前日の7月14日夜に飛行機で徳島入りしました。徳島駅前に到着した時には大勢の人が集まっています。どうしたのかと思ったらちょうど眉山方向から花火が上がっていました。秋田町に出てみたら若いカップルや家族連れも多く非常に賑わっており、新町の川沿いには屋台も出ていました。ホテルのフロントの方にお聞きしたらお祭りだったとのこと、何のお祭りかまではわかりませんでした。若い人も多く活気が感じられたのでいい時に来られたなと嬉しく思いました。

翌15日が総会でしたが、朝10時半からだったので早めに蔵本まで行って、以前下宿していた辺りや、大学病院内を少し見て回ることができました。在学していた45年前とはすっかり様変わりしていましたが、大学病院内にたくさんの絵画や写真が飾られ、一休みできる椅子やテーブルも用意され、来院された患者や家族が心地よく過ごせる心配りを随所に感じました。在学当時よりビルも増え設備も充実している様子で、母校の発展は卒業生にとって本当に嬉しいことなのだとつくづく思いました。総会が開催

された青藍会館は元学生寮があった場所で、閉寮前の最後の2年間を過ごした思い出の地でもあり、感慨深いものがありました。

さて、前置きが長くなりましたが九州支部の近況を簡単にご報告いたします。2024年4月現在会員数は179名です。福岡県が最多で沖縄県が続く、両県で全体の半数を超えます。

九州支部の総会・懇親会は私が支部長を引き継いだ2016年8月6日に第1回を開催し、2019年3月16日に第2回、コロナ禍を経て2023年10月21日に第3回を開催することができました。参加者は概ね会員の1割程度です。毎回鹿児島、宮崎、長崎、山口などご遠方からもご参加いただき、第3回は本部から荒瀬会長ならびに丹黒副会長（同期）も駆けつけて下さり、感激いたしました。荒瀬会長からは青藍会という名前の由来と現状をお伝えいただき、若い会員を増やして活性化を図ってられる旨の力強いお言葉をいただきました。丹黒副会長からは2023年の国試全員合格という快挙と、青藍会賞の賞金アップが入会者の増加に大いに貢献した旨のご報告をいただきました。ご出席の先生方全員とご歓談するには全く時間が足りませんでしたが、ご参加いただいた全員の先生方の近況もお聞きすることができ、大いに刺激になりました。特にパソコンの修理で遅れてお見えになった名誉会員の生田先生の90歳になられているとはとても思えないお元気なご挨拶には、これから歳を重ねる上で元気と勇気をいただきました。

今後は会員のメールアドレス収集にQRコードによる案内を導入し、毎年決まった日例えば10月の第4土曜日などに開催することで、できるだけ若い年代の卒業生が気軽に参加して有益な情報交換ができるような会を目指していこうと思っています。九州支部を今後ともどうかよろしく願いいたします。



九州支部報告（武井実根雄支部長）

青藍会々則

第1章 名称

第1条 本会は、青藍会（徳島大学医学部医学科同窓会）と称する。

第2章 目的

第2条 本会は、会員相互の親睦を厚くし、学術の向上を図り、もって母校の発展に尽くすことを目的とする。

第3章 会員

第3条 本会の会員は、次の5種類とする。

- 1 正会員 徳島大学医学部医学科、徳島医科大学及び徳島医学専門学校の卒業生並びに、徳島大学医学部医学科の在学学生
- 2 名誉会員 本会对し功労顕著にして評議員会で推薦した者
- 3 特別会員 次の一に該当する者を特別会員とする（ただし、正会員は除く。）
 - (1) 徳島大学大学院医歯薬学研究部医学系（栄養学分野を除く。）の教授、徳島大学病院長及び同病院医学科の教授、徳島大学蔵本事務部長並びにかつてその職にあった者
 - (2) 徳島大学医学部医学科、徳島医科大学、徳島医学専門学校及びそれらの附属病院の教授、助教授、講師、薬剤部長、事務部長（医学部事務長）の職にあった者
- 4 準会員 前3項以外の者で、次の各号のいずれか一に該当する者のうち本会に入会を希望する者
 - (1) 徳島大学大学院医学研究科学生
 - (2) 徳島大学大学院医歯薬学研究部医学系（栄養学分野を除く。）及び徳島大学病院医学科に在籍し、又はかつて在籍した者
 - (3) 徳島大学医学部医学科、徳島医科大学、徳島医学専門学校及びそれらの附属病院に在籍した者
- 5 賛助会員 本会の発展に対して特別賛助があったと評議員会で認められた者

第4章 役員

第4条 本会に、会務を処理するため次の役員を置く。

名誉会長	1人
顧問	若干名
会長	1人

副会長	3人
支部長	各支部1人
評議員	各期、各学年2人、及び支部長
執行幹事	若干名
監査	2人

第5条 役員は次により選任する。

- 1 名誉会長は、医学部長の職にある者を充てる。
- 2 顧問は、会長の任期を終えた者及び評議員会で推薦された者を充てる。
- 3 会長及び副会長は、評議員会の推薦により総会の承認を得て選任する。
- 4 支部長は、支部における正会員の中から選出する。
- 5 評議員は、各期、各学年の代表者及び支部長をもって充てる。ただし、各学年の代表者は総代及び副総代とする。
- 6 執行幹事は、評議員会の推薦により選出する。
- 7 監査は、評議員会の推薦により選出する。

第6条 役員は、次の職務を行う。

- 1 会長 本会を代表し会務を総理する。
- 2 副会長 会長を補佐し、会長事故あるときは、これを代理する。
- 3 支部長
 - イ 支部を主宰し、本部との間の連絡にあたり、支部の運営にあたる。
 - ロ 評議員としての職務を行う。
- 4 評議員 会員を代表し、諸般の会務を審議し、決定する。
- 5 執行幹事 評議員会において定められた会務を執行する。
- 6 監査 事務の管理執行を監査する。

第7条 役員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

- 2 会長の任期は、原則として連続2期を限度とする。

第8条 役員は、任期終了後といえども後任者の就任するまでは、その職務を行うものとする。

第9条 役員は、すべて名誉職とする。

第5章 会議

第10条 会議は、次の4種類とする。

- 1 通常総会
- 2 臨時総会
- 3 評議員会

事業報告

令和5年度 事業報告（令和5年4月1日～令和6年3月31日）

[実施事業]

令和5年4月6日（木）

徳島大学入学式に於いて、荒瀬会長ご祝辞。医学部第二臨床講堂にて医学部医学科新入生歓迎会開催。入学生112名に坂東智子副会長よりご祝辞、酒井陽子先生、森岡久尚先生より歓迎の言葉が送られた。会報第99号、同第100号、青藍会だより第4号を贈呈

令和5年5月27日（土）

東京支部総会にオンライン参加（荒瀬誠治会長、西岡安彦医学部長）

令和5年6月

青藍会会報第101号発行（5,700部）

令和5年6月9日（金）

医学科総代、副総代との懇談開催（青藍会館小会議室）

令和5年6月17日（土）

香川支部総会に参加（荒瀬誠治会長）

令和5年7月17日（月）

令和5年度青藍会総会開催（ハイブリッド開催）

令和5年8月5日（土）

近畿支部総会に参加（荒瀬誠治会長）

令和5年9月16日（土）

愛媛支部総会に参加（坂東智子副会長）

令和5年10月6日（金）

徳島大学病院卒後臨床研修センターへの寄付

令和5年10月20日（金）

第40回青藍会・医学科講演会開催

「iPS細胞を用いた神経再生」

講師 京都大学 iPS細胞研究所所長

高橋淳先生

「“世界初”に挑戦するということ」

講師 株式会社ビジョンケア代表取締役

高橋政代先生

令和5年10月21日（土）

九州支部総会に参加（荒瀬誠治会長、丹黒章副会長）

令和5年11月5日（日）

兵庫支部総会に参加（荒瀬誠治会長）

令和5年12月8日（金）

青藍会奨励賞の授与（2023年度医学科3年次

医学研究実習発表者優秀者表彰）（荒瀬誠治会長）

令和5年12月11日（月）

青藍会スポーツ奨励賞の授与（荒瀬誠治会長、西岡安彦医学部長）

令和5年12月

青藍会会報第102号記念号発行（5,700部）

令和6年1月9日（火）

医学科4年生に白衣授与・Student Doctor認定証授与式に出席（荒瀬誠治会長）

令和6年1月13日（土）

広島支部総会に参加（荒瀬誠治会長）

令和6年2月17日（土）

岡山支部総会に参加（荒瀬誠治会長）

令和6年2月26日（月）

青藍会スポーツ奨励賞の授与（荒瀬誠治会長）

令和6年3月9日（土）

東京支部総会に参加（荒瀬誠治会長）（西岡安彦医学部長はオンライン参加）

令和6年3月18日（月）

青藍会だより第5号発行（1,800部）

令和6年3月22日（金）

第71回卒業式に参加（荒瀬誠治会長）

医学部70期生（122名）に記念品（スクラブ、会報第101号、同第102号、祝ご卒業、青藍会だより第3号、第4号、第5号）贈呈

令和5年度医学部各賞授与式にて、荒瀬誠治会長より代表者へ卒業記念品の贈呈

[会議の開催]

令和5年5月22日（月）

広報委員会（Zoom会議）

(1)青藍会会報第101号の編集について

(2)青藍会会報第101号のホームページ公開・非公開（案）について

(3)特別寄稿（恩師の近況）の原稿依頼について

(4)青藍会会報第102号（令和5年12月発行予定）の掲載内容について

(5)青藍会だより第5号（令和6年4月発行）について

(6)その他

令和5年6月16日（金）

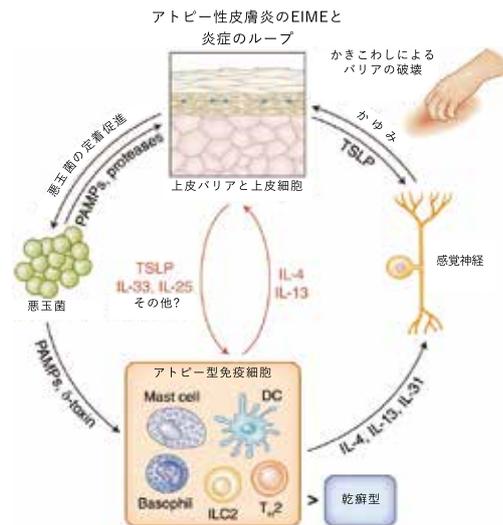
令和6年度 事業計画

- 1 新入生歓迎会（4月5日）
- 2 青藍会会報第103号（6月）・第104号（12月）発行
青藍会だより第6号（4月）発行
- 3 総代・副総代との懇談会（5月17日）
- 4 2024年度青藍会賞募集
- 5 青藍会総会・評議員会・支部長会（ハイブリッド開催）（7月15日）
- 6 青藍会 MD-PhD 奨励金授与・青藍会賞授与（7月15日）
- 7 青藍会スポーツ奨励賞の授与
- 8 徳島大学病院卒後臨床研修センターへの寄付
- 9 第41回青藍会・医学科講演会（10月25日）
- 10 青藍会奨励賞授与（12月）
- 11 白衣授与（医学科4年）（1月）
- 12 卒業生への記念品贈呈（3月）
- 13 役員会・各種委員会の開催
- 14 青藍会各支部総会への本部役員派遣
- 15 青藍会館の管理・運営
- 16 その他





日本経済新聞朝刊（2018年8月10日34面）



Dainichi et al. Nat Immunol 2018

図1 上皮-免疫微小環境 (EIME)

C10orf99ペプチドは上皮の生体防御とバリアを制御する

アトピー性皮膚炎の多様な臨床像に共通の因子をさぐるため、4つの異なる動物モデルで発現する遺伝子を網羅的に調べました。すると、4つのモデルの病変部で共通して発現が促進する遺伝子は4つのみでした。このうちの1つが、C10orf99という、機能が不明のオルファン遺伝子でした。

C10orf99がコードする57アミノ酸のC10orf99ペプチドは、ヒトのアトピー性皮膚炎でも、病変部の表皮で発現が著しく上昇していました。また、乾癬の病変部でも同様に発現が上昇していました。

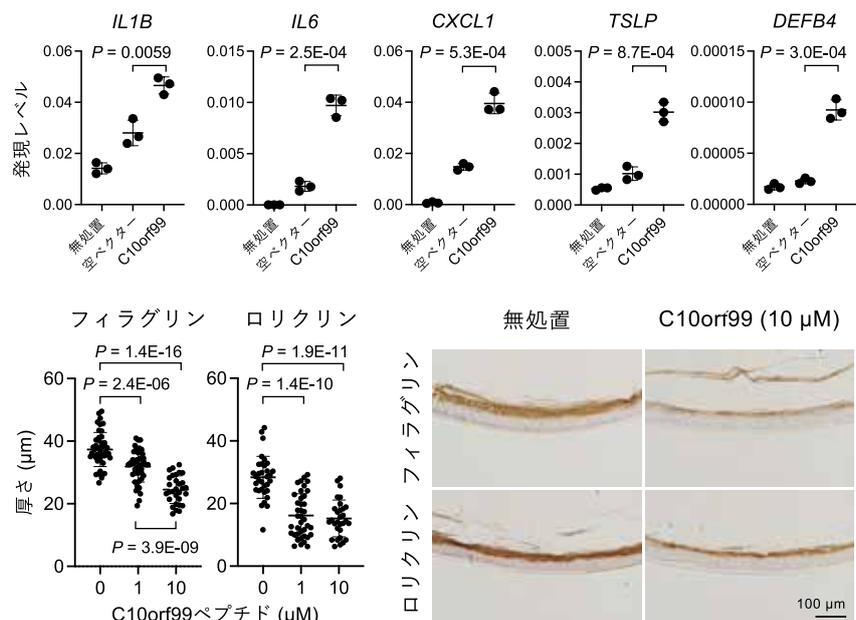
C10orf99ペプチドの発現が炎症の原因なのか結果なのかを明らかにするため、表皮細胞にC10orf99を遺伝子導入してRNAシーケンス解析を行ったところ、空のプラスミドを遺伝子導入した細胞に比べて、IL1BやIL6など、多くの炎症性メディエーターの発現が上昇していました。さらに、合成C10orf99ペプチドを3次元培養表皮に加えたところ、フィラグリンやロリクリンといったバリア分子の発現が、濃度依存性に低下しました(図2)⁸⁾。

以上の結果から、C10orf99ペプチドは、上皮の生体防御とバ

リアを制御するマスターレギュレーターの可能性が考えられ、研究を続けています。

香川医療圏の皮膚科診療の現状と展望

2020年に現在の香川大学に皮膚科学教授として着任しました。前教授の退任に合わせて残りの教室員もみな退職したため、空の教室に赴任することになりました。幸い、京都大学から加来洋講師と一緒に赴任してくれたこと、また1名の入局者を迎えたことで、3名でのスタートでした。毎年メンバーを迎えて、現在、大学は6名、県下に2名が出向し、来年度は4名の入局を予定しています。小さなチーム



Dainichi et al. Front Immunol 2022

図2 C10orf99は炎症とバリアを制御する

生命金属元素「鉄」の新たな役割

徳島大学大学院医歯薬学研究部薬理学分野
教授 池田 康 将 (医学部43期)

はじめに

1997年に徳島大学を卒業後、内科学第一講座（現血液・内分泌代謝内科学分野）に入局し、大学病院や関連病院において内科学を研鑽いたしました。大学院での学位取得後、米国留学を経て、帰国時に薬理学分野に異動しました。2020年8月より薬理学分野教授に就任して、現在に至ります。本講演では、薬理学分野の現況について紹介させていただきます。

教育について

薬理学は基礎医学と臨床医学との橋渡しの役割を担う重要な学問です。教育の取組みとして、「基礎医学統合実習」と「薬理学ロールプレイ実習」を紹介いたします。基礎医学統合実習は、実習における水平的統合です。従来、薬理学、生理学、生化学、細胞生物学の基礎系4分野それぞれの教室が、講義に引き続き行っていた実習を、2年生2月に集中して行います。薬理学の実習項目は、自律神経調節薬を扱った内容であり、生理学の実習項目と関連性があることから、実習の水平的統合は効果的といえます。実際に、学生アンケートも概ね満足度は高いため、学習効果が最大限に発揮されるように適宜見直して改善していく予定です。また、昨年より薬理学ロールプレイ実習を行っています。これは、症例シナリオに沿って、学生に医療者、患者・家族と役割を演じてもらいつつ実践的に薬理学を学ぶものです。今年度は薬学部と合同で行い、多職種連携の要素も取り入れました。医学科生にとって刺激になり、学習へのモチベーションアップにつながるようです。今後も薬理学を通じて、試験だけにとどまらない、医学知識の体系的理解につながる教育に尽力したいと考えています。

研究について

現在、教室の研究テーマは3つあります。本日は薬理学に移ってから開始した鉄の研究について紹介させていただきます。

1. 鉄と酸化ストレス

鉄は生体内において5gと最も多く存在する金属

元素であり、ヘモグロビンなどのヘムタンパク質合成、ミトコンドリアのエネルギー産生、酵素活性化、細胞増殖やアポトーシス、エネルギー代謝など様々な生理機能に関与して生体内恒常性を維持しています。生体内鉄は過不足にならないように厳密に制御されています。細胞外ではトランスフェリンなどに結合した状態で、細胞内ではフェリチンに格納された状態で存在します。しかし、鉄結合タンパク質に格納されないイオン化遊離鉄は、フェントン反応 ($\text{Fe}^{2+} + \text{H}_2\text{O}_2 \rightarrow \text{Fe}^{3+} + \text{OH}^- + \text{OH}$) により非常に毒性の強いヒドロキシルラジカル産生を触媒することで細胞傷害性に作用します。生体内鉄量の指標である血清フェリチンと酸化ストレスは正相関することから、生体内鉄量は酸化ストレスを反映すると考えられます。

2. 鉄と肥満・糖尿病

ここ30年間で、それまで無関係だと思われていた鉄と糖尿病の関連性が明らかにされています。正常集団と比較して、耐糖能異常や2型糖尿病患者では血清フェリチン値で表される生体内鉄量が高値であること、赤身肉などでヘム鉄を多く摂取するほど2型糖尿病の発症リスクが増加することが報告されました。また、瀉血による生体内鉄量減少がインスリン感受性やインスリン分泌能を改善させることも示されています。

肥満は糖尿病を含めた各種疾患の原因となります。鉄と肥満に関して、内臓脂肪蓄積量と血清フェリチン値が正相関することや肥満糖尿病マウスの白色脂肪組織の鉄濃度が高値であることが示されています。そこで我々は、生体内鉄量減少が肥満改善につながる仮説を立てて、肥満糖尿病モデルマウスへの鉄キレート薬デフェロキサミン (DFO) 投与による肥満に対する効果について検証しました。DFO群では体重増加の抑制傾向がみられ、内臓脂肪組織重量ならびに脂肪組織径からも肥満が抑制されました。脂肪組織における炎症や酸化ストレスもDFO群で低減されました。肥満において、酸化ストレスや炎症性サイトカインの増加は肥満進展の悪循環を促進するが、鉄除去はそれらを抑制することを明らかにしました (Tajima and Ikeda, et al. *Am J Physiol Endocrinol Metab.* 2012)。この他にも、鉄依存性の炎症と酸化ストレスの総称「鉄ストレス」が、肥満糖尿病以外にも腎臓病、血管リモデリング、サルコ

2023年度青藍会賞の授与及び受賞講演

2023年度青藍会賞選考過程について

役員会学術委員

久保宜明（医学部34期）

第31回2023年度青藍会賞の選考委員会は、令和6年2月8日、青藍会館小会議室にて開催しました。今回は2名の応募があり、青藍会から事前に依頼しました6名の選考委員の先生方に書面審査をお願いし、その結果により、当日、出席可能であった4名の選考委員による合議審査が行われました。なお、今回の選考委員長には委員間の互選により西村明儒先生が選出されました。

2名からの応募はいずれも優れた研究業績であるという評価でしたが、論文内容の質および今後の研究の発展性について総合的な観点からの選考がなされ、全員一致で以下の1名を青藍会賞の受賞対象者として選考し、令和6年2月15日に開催された役員会において、審議の結果、承認されました。

来年も引き続き積極的な応募をよろしくお願いいたします。

受賞者

佐藤正大氏（医学部52期）

徳島大学大学院医歯薬学研究部
呼吸器・膠原病内科学分野 准教授



令和6年度青藍会総会にて

「肺線維症の病態解析と新規診断法の開発」

徳島大学大学院医歯薬学研究部呼吸器・膠原病内科学分野 准教授

佐藤正大（医学部52期）

はじめに

この度は、青藍会賞を賜り、大変光栄に感じております。青藍会会長である荒瀬誠治先生をはじめ、選考委員の先生方、青藍会の皆様、そしてこれまでご指導いただきました多くの先生方にあらためて深く感謝申し上げます。今回は私と、私の所属する呼吸器・膠原病内科の良性肺疾患グループが行ってきた肺線維症研究について紹介させていただきます。



特発性肺線維症の病態

特発性肺線維症は厚生労働省指定難病の一つであり、平均予後が2～3年という、悪性腫瘍に匹敵するほど予後不良な疾患です。特発性肺線維症では、正常の肺修復において上皮障害に引き続いて起きる組織修復過程に異常が生じ、「線維芽細胞の異常増殖」や「細胞外基質の異常蓄積による組織剛性の増加」の結果、肺組織が線維化に至ります（図1）。

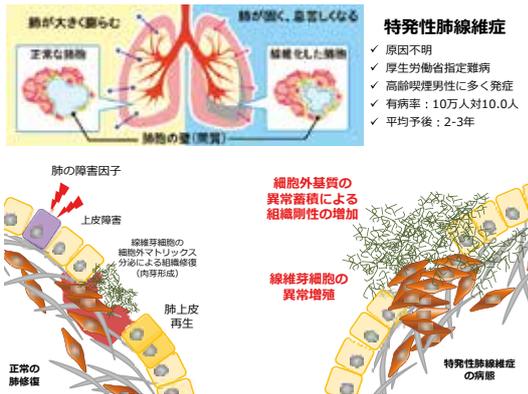


図1

Fibrocyte 由来増殖因子とニンテダニブ

特発性肺線維症は原因不明の疾患であり、なぜこのような線維芽細胞の異常が起きるのか、十分に分かりません。そこで私達が着目したのが、特発性肺線維症患者において、末梢血中数と生存率に相関があることが報告されていた単球由来の間葉系前駆細胞である fibrocyte です。

ベーリンガーインゲルハイム社との共同研究の検討の結果、単球から分化した fibrocyte は、線維芽細胞増殖因子や血小板由来増殖因子のような、種々の増殖因子をより多く分泌するようになり、肺線維芽細胞の異常増殖を促進することが見出されました。さらにそれらの増殖因子経路を標的とする分子標的薬ニンテダニブにより、その作用を抑制することも判明しました (Sato S, et al. Respir Res, 2017) (図2)。ニンテダニブはその後、臨床試験を経て抗線維化薬オフェブ®として上市され、現在では特発性肺線維症の治療の中心的存在となっています。

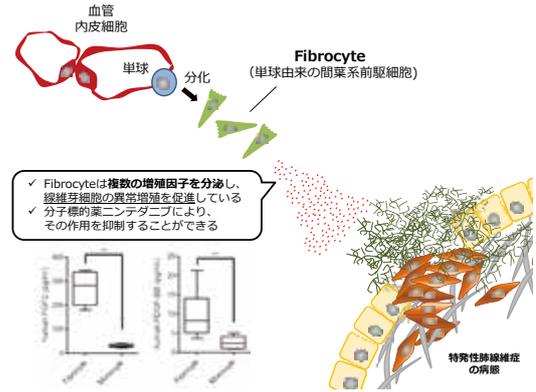


図2

Fibrocyte 由来線維化促進性 microRNA

しかし臨床において、ニンテダニブでも特発性肺線維症の病勢進行を完全に抑制はできない、という事実が次の研究へのヒントになりました。ニンテダニブで抑制できないのであれば、増殖因子以外の何らかの傍分泌因子が肺線維症の病態制御に関係しているのではないかと考え、fibrocyteの分泌する細胞外小胞体 (Extracellular Vesicles; EVs) に着目することにしました。EVsは内部に mRNA や microRNA などを内包して分泌され、他の細胞に取り込まれることでそれらを伝達するという、細胞間情報伝達において重要な役割を担っている傍分泌因子です。

我々が正常肺あるいは線維化肺由来の fibrocyte が分泌する EVs を比較検討したところ、線維化肺由来 fibrocyte-EVs は、線維化促進性 microRNA である miR-21 をより多く内包していることが判明しました (図3A)。次に、この差異が生じる理由について、肺の脱細胞化技術を用いた検討を行いました (図3B)。これは脱細胞化した線維化肺組織を正常肺由来 fibrocyte で再細胞化し培養することで、線維性組織の微小環境に晒されたときの fibrocyte への影響を検証した実験です (図3C)。その結果、脱細胞化線維化肺組織での培養は fibrocyte の miR-21 の発現を上方制御しました。

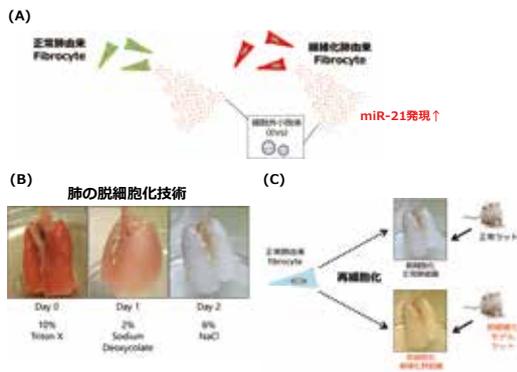


図3

さらに検討を重ねた結果、fibrocyteは線維化肺組織内で構築された異常な細胞外基質、それに伴う高い剛性、そして高発現されるTGF- β 1の影響を受けてmiR-21を高発現するように性質が変化することが判明しました。こうして向線維性の特質を獲得したfibrocyteはmiR-21を内包した細胞外小胞体の分泌を介して、周囲の肺線維芽細胞に線維化促進効果を与え、さらに肺組織の剛性や細胞外基質の沈着が進行するという、fibrocyteと線維化肺組織の間の負のスパイラルが新たに見出されました(図4)。

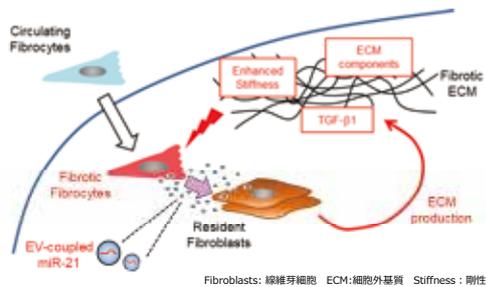


図4

本研究では、基礎研究で得られた知見をヒトの臨床検体でも実証すべく、徳島大学病院で臨床研究を行いました(課題名:気管支肺胞洗浄液中のfibrocyteにおけるマイクロRNA発現の疾患別差異に関する検討,申請番号:3166-3)。本学で行われたこの臨床研究の結果、ヒト検体においても基礎研究結果を支持する結果が得られ、基礎研究結果と合わせることでThorax誌(Impact Factor=10)に発表することができました(Sato S, et al. Thorax, 2021)。

老化細胞除去薬 ARV825

このように肺線維症病態におけるfibrocyteの役割について研究を続けてきたのですが、2022年に参加していた特発性肺線維症に対するペントラキシン2(fibrocyteの分化を抑制できる炎症性メディエーター)の治験がnegativeに終わったこともあり、一度、別の細胞標的にも目を向けて研究を行ってみることにしました。

そこで着目したのが肺内の老化細胞です。肺の上皮細胞に酸化ストレスなどによる障害から、修復不可能なDNAダメージがはいると、一部の細胞は細胞老化に陥ります。このような老化細胞は、加齢と共に肺内に蓄積し、肺機能低下の一因となります。また、老化細胞は細胞老化随伴分泌現象(SASP)と呼ばれる炎症性サイトカイン、ケモカインを分泌することで肺線維症の進行に関与していることが報告されています。

そこで私は肺内の老化細胞の除去による肺線維症改善を目指した検討を行いました。その結果、新規BRD4阻害薬であるARV825は、線維化を促進する非老化肺線維芽細胞の分化や細胞外基質の産生を抑制すると同時に、老化した肺線維芽細胞や肺上皮細胞には細胞死を誘導し、SASP発現を低下させることが見出されました(図5)。肺線維症モデルマウスを用いた検討でも、ARV825は肺の線維化や体重減少、呼吸機能の低下を改善させ、ARV825が有望な肺線維症の新規治療薬候補であることを示すことができました(Sato S, et al. Respir Investig, 2023)。

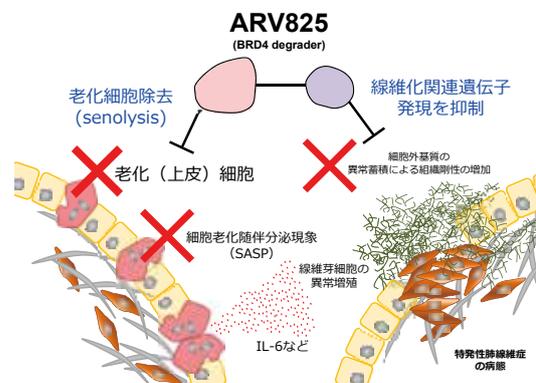


図5

青藍会賞募集

2024年度青藍会賞募集

2024年度青藍会賞を下記のとおり募集します。

本賞は青藍会会員による学術研究の発展と奨励のために、若手研究者の優れた業績に対して授与するものです。奮ってご応募下さい。

1. 応募資格

2024年12月末現在で42才未満の青藍会正会員
但し、2024年度までの会費完納入者であること。

2. 審査対象

2020年1月から2024年12月までの研究業績を対象とします。

なお、選考では徳島大学で主として行われた研究であることを重視します。

3. 応募締切

2025年1月14日（火）（応募締切り後は提出書類の変更を認めません）

4. 応募手続

以下の書類を青藍会事務局へ提出して下さい。（**原本とそのコピー10部をご用意下さい**）

1. 申請書（別紙様式1）
2. 履歴書（略歴）（別紙様式2）
3. 主指導者の推薦状（別紙様式3）
4. 原著論文（**2020年1月～2024年12月末に発刊された原著論文**；通し番号をつけ、年代の近い順に記載し、主たる論文3編には通し番号に○をつけること。主たる論文は筆頭著者の論文に限定しない。応募者には下線をひくこと。）（別紙様式4）
5. 主たる論文3編の要旨；申請者が論文の研究においてどこに寄与したかの記載を含めること。（各400字程度）（別紙様式5）
6. 主たる論文3編の別刷り（コピー可）
7. 競争的資金の獲得状況（**2017年1月～2024年12月末までに獲得した研究費の名称、研究期間、研究題目、直接経費の研究費総額。研究代表者の資金に限る。**）（2024年12月末時点で採択が決定したものも含む）（別紙様式6）
8. 今後の研究の展望（800字程度）（別紙様式7）

なお、同一推薦人が複数者を推薦する場合は推薦順位をつけること。

申請書等の各様式は青藍会事務局（seiran@tokushima-u.ac.jp）にご請求下さい。

5. 選考

青藍会会長から委嘱された選考委員会が行います。

6. 受賞者数

原則一名

7. 青藍会賞の授与

賞状及び研究助成金100万円の目録を青藍会総会開催日に授与します。

研究助成金は受賞者あてで教室への委任経理金（奨学寄附金）とする。

8. 受賞講演

青藍会総会開催日当日、受賞講演を行っていただきます。（30分程度）

お問合せ先 青藍会事務局 TEL 088-633-7109（内線2601）
seiran@tokushima-u.ac.jp

医学科学生（総代副総代）との懇談会を開催しました

学生会員と直接話し合う場を持ちたいと昨年6月に初めて懇談の場を設け、学生からの意見・要望を直接聞く意見交換を行いました。今後も継続すべきとのことで、5月17日（金）に2回目の懇談会を開催しました。今回も、各学年総代・副総代にお声掛けし、青藍会会長・副会長、医学部長及び学務課（陪席）にもご参加いただき、荒瀬誠治青藍会会長、西岡安彦医学部長の挨拶の後、学生会員から感想や意見が次々と出され、有意義な時間となりました。

青藍会の懇談に参加して

福田 翔一（医学科6年総代）

昨年の懇談に引き続いて今年も参加させていただきました。青藍会の先生方が後輩である私達を我が子のように大切に思っていることを改めて強く認識し、先生方の想いに答えられるように頑張っていこうと決意をいたしました。今後も71期の代表として皆様との橋渡しに尽力いたします。

榎本 侑生（医学科5年総代）

この度は貴重な機会を頂きまして有難うございました。私たちの背中を支えて下さる立派な先輩方の存在を感じられたとともに、自分たちも将来そうなれるように頑張らなければと思える刺激的な機会でした。

石田 紘基（医学科5年副総代）

まずは、関係者の皆様このような会をご用意していただき、ありがとうございました。様々な意見が交わされ、終始和やかに進行しておりました。今後とも学生の皆様がより必要とするサポートを提供していただけるよう、よろしく願いいたします。

鍛冶 尚紀（医学科4年総代）

今回の懇談会ではカジュアルな雰囲気先生方に質問や要望を伝えさせていただくことができました。加えて、青藍会という組織が生涯にわたって我々のことをサポートしていただけるというお言葉をいただけたことで、青藍会の存在を改めて認識でき、非常に心強かったです。今回はお忙しい中ありがとうございました。

松本 りか（医学科4年副総代）

この度は貴重なご機会をいただきありがとうございました。先生方が私たち学生を気にかけてくださっていることを知り、大変ありがたく、嬉しく思っております。今年はCBTも控えておりますので、白衣授与式で胸を張ってお会いできるように、精進して参りたいと思います。

石田 祐也（医学科3年副総代）

懇談会の場を設けて下さり、ありがとうございます。学生からの些細な意見にも親身に答えて下さる様子から、私たち学生が常に先輩方に支えられていることを実感しました。少しでもそのご期待に応えられるよう、努力を重ねていきたいと思えます。

杉本 智哉（医学科1年総代）

今回は青藍会の方々と懇談会という貴重な機会を設けていただきありがとうございました。

今回の懇談を通して青藍会の皆様に私たち学生の背中を支えていただいているということに改めて感じられたとともに私たちもそのような存在になれるように努力していかなければならないと思うことができる刺激的な機会でした。

角 優花（医学科1年副総代）

この度は、青藍会の先輩方を直接感じられる貴重な機会をくださり、ありがとうございました。

先輩方が、私たちの声に暖かく耳を傾けてくださるのを感じ、これからの学生生活がとても明るく、心強く思えました。

先輩方がいらっしゃる徳島大学へ進学できたことを心から誇りに思います。



第41回青藍会・医学科講演会を開催

レジリエンスをもつこと

蔵本祭学術講演委員長

森田彩夏（医学科3年）

令和6年10月25日（金）に第41回青藍会・医学科講演会を開催いたしました。皆様のおかげで今年度も無事に講演会を行うことができ、大変うれしく思っています。

今年度は大阪大学心臓血管外科名誉教授の澤芳樹先生を講師としてお呼びし、「医学のレジリエンス～みらいへの挑戦と貢献～」という演題でご講演いただきました。澤先生は、大阪けいさつ病院院長や、未来医療・再生医療の国際拠点である「中之島クロス」の理事長を務めておられる大変ご高名な先生であり、講演会を拝聴することができて一学生としてとても感銘を受けました。

演題にもある「レジリエンス」とは、「困難をしなやかに乗り越え回復する力」を指し、澤先生の中でも流行語になっているそうです。私はこの言葉を初めて知ったのですが、私が今ここにいるのも、私の「レジリエンス」によるものかもしれないと感じ、この言葉について深く理解できました。

澤先生のご講演の中で、臓器移植や脳死についてのお話があり、私は日本の「死の定義」について興味を持っていたため、とても興味深かったです。特に「和田移植」に関しては、臓器移植に関して多くの疑念を残す事件になり、日本人の性格も相まって人の死を定義することを避ける風潮が強くなったことで、いまだ臓器移植への理解が得られていません。日本において臓器移植は、技術ではなくルールの問題が大きいと先生は話されており、とても悔しい気持ちになりました。

また、先生が研究者として開発された「拍動する心筋シート」について、お話だけでなく動画も見せていただきました。心筋シートが心臓にぴったりとくっついて周囲の細胞と調和して働いており、とても驚きました。

最後の質疑応答の際に先生が「医者になってから妥協するな」とおっしゃったことが大変心に残っています。先生は学生時代まじめな生徒ではなかったということでしたが、今こうあるのは、医師になり成果を残すために少しの妥協も許さなかったからだ



と思います。「どちらの道が正しいかはわからないから、選んだ道を正しくするために努力する」とは本当にその通りで、今後の人生の指標となる考えを聞くことができたと思います。懇親会の際に「頑張っ」と声をかけていただき、私の「レジリエンス」を最大限発揮して進んでいきたいと感じました。

当日は多くの学生や教職員の皆様にお越しいただき、非常に有意義で楽しい時間を過ごしていただけたと思います。最後になりましたが、今回の講演会にご尽力いただきました青藍会事務局の皆様、先生方、職員の皆様に深く感謝いたします。そしてご多忙の中お越しくくださり、貴重なご講演をしてくださった澤芳樹先生に心より御礼申し上げます。

澤芳樹先生のご講演を拝聴して

蔵本祭学術講演副委員長

安藤佑真（医学科3年）

大阪けいさつ病院院長であり、世界で初めて心筋細胞シートの手術を実現された澤芳樹先生のご講演を聞かせていただきました。前半では澤先生ご自身の生い立ちについて語っていただきました。澤先生は大阪大学医学部卒業後、心身の鍛錬をしたいと一番厳しいと言われた第一外科に入り、努力を重ねられました。当時から今までずっと小澤凱夫教授の「凡人は努力すべし」という言葉を強く意識して、「簡単な道よりも難しい道を選ぶ」「絶対に自分に妥協しない」ことを実践されてきました。その後ドイツ留学時、教授と学生がファーストネームで呼び合いリスペクトし合う関係に驚き、のちに教授に就任された際に

第41回青藍会・医学科講演会を開催



そのような在り方を取り入れられたそうです。

心筋シートはiPS細胞を心筋細胞に変化させて、直径約3.5センチメートルのシート状に加工したもので、手術では心臓の上に心筋シートをのせ15分おくと糊のようにくっつき心臓の機能を回復させることができます。重症心不全に対しては現在補助人工心臓や心臓移植といった治療が適応されますが、合併症のリスクやドナー不足など問題点は多く、心筋シート治療が新しい治療法となる可能性があります。また、患者への負担が少なく早めに心機能の低下を抑えられることから、一般的なカテーテル手術においても使えるよう進められています。

日本医学会総会のテーマにも掲げられ、今回の演題にも使われた「レジリエンス」という言葉は、復元力、しなやかさという意味で、人類はレジリエンスを重ねながら進化してきました。医学もまた同様に、わずか数百年の歴史の中でもレジリエンスを重ねながら進化してきて、これからもレジリエンスで人類を救うことがあるだろうという未来の医療への、また未来の医療を担うであろう私達への期待も込められたお言葉でした。

心臓血管外科の第一線で長い間活躍されている先生からお話を伺うことができ、非常に刺激になりました。医師としてだけではなく人としても素晴らしいのを感じ、周囲との関わり方やこれから医師になるうえで意識すべきことなど、勉強になるお話を多くいただきました。私も「まず相手の気持ちを思いやる」ことを普段から念頭に置いて生きていきたいです。

最後になりますが、今回の講演に尽力していただいた職員の皆様、先生方、青藍会事務局の皆様に深く感謝申し上げます。そしてご多忙の中貴重なご講演をしていただいた澤芳樹先生に心よりお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



青藍会の助成活動

徳島大学病院卒後臨床研修センターの活動報告

徳島大学病院卒後臨床研修センター長
大 藤 純（医学部43期）

令和6年4月より、徳島大学病院卒後臨床研修センター長を拝命しました大藤と申します。青藍会の皆様には、日頃多くの研修医の受け入れやご指導いただき、また卒後臨床研修センターにご支援を賜り、敬意と共にお礼を申し上げます。

大学病院の研修プログラムは、大学病院ならではの高度医療を体験できるほか、県内外の研修病院や地域の診療所で診療経験を積む、嚮掛けの研修を特徴としています。研修医の指導体制は大変充実し、それぞれの研修医にマッチした研修スケジュールを作成することで、非常に満足度の高い臨床研修を実現しています。院内研修では、各診療科の先生方のご支援のもと、多くの教育講座やセミナー、スキルスラボを活用したシミュレーション研修などを実施しています。また、本年11月には、徳島県臨床研修指導医養成講習会の開催を予定しております。研修目標の立て方、研修評価方法、適切なフィードバックの方法、地域医療の重要性などを検討するワークショップなど、指導医として必要な知識・態度などを学ぶ良い機会となっております。

本年4月から卒後臨床研修センター長として運営に携わっていますが、これまでに多くの方々が作り上げて来られた当センターのシステムは大変充実しており、魅力的な研修を提供できていると実感しています。豊富な協力病院を含む研修プログラム、魅力的な研修パンフレットの作成、WEB配信や県外での研修プログラム説明会ならびに徳島大学病院卒

後研修プログラム説明会などを通じた広報活動、当センタースタッフによる研修医一人一人への面談と研修指導、研修目標や達成度の評価など、きめ細かい対応が実践されています。当センタースタッフは皆、大変気さくで思いやりがあり、研修医との垣根もなく、気軽に相談できる雰囲気があります。初期研修では、プライマリーケアを中心とした基本的診療能力や医師としての倫理観を習得するとともに、できるだけ多くの診療科や施設を経験し、医師としての視野を拡げてほしいと思っています。

また、今年度より徳島大学では、研修医の給与を市中病院並みに上げて頂きました。全国的に国公立大学病院の研修医の給与が極端に安いという不満は以前から問題となっておりましたが、これにより給与面での不公平感は解消され、より高いモチベーションで研修してくれることを期待しております。

徳島大学病院の研修プログラムは、各協力病院や診療所との連携を密にし、研修医のひとりひとりの要望に答える形で、各病院の特徴を活かした融合研修を進めています。徳島県全体で医師を育てる、“All 徳島”での研修環境を構築し、徳島県の若手医師育成と医療の質の向上に寄与できるよう取り組んでゆきたいと思えます。

今後とも皆様方には卒後臨床研修へのご理解と共に、ご指導・ご支援を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

書籍紹介



このコーナーでは、正会員、名誉会員及び学内関係者の著書を紹介することとしています。専門家向けの書籍および一般向けの書籍を紹介していきたいと考えています。自薦、他薦どちらでも結構です。青藍会事務局までお送り下さい。なお、掲載については広報委員会にご一任下さい。



「往診屋」刊行によせて

(発行元 幻冬舎 2024年3月発行)

著者 渡部 豪 (医学部40期)



2024年3月、「往診屋—地域の患者の人生を診る365日—」のタイトルで、幻冬舎から著書を出版させていただきました。

私は、診療、経営、私生活とも未熟なところが多分にあり、本を出すなど誠に恐れ多いことでしたが、何とか地域の在宅医療の実態とこれを取り巻く環境について、多くの方に知っていただきたいと考え、思い切ってみました。

私の住んでいる徳島県吉野川市山川町及びその周囲は、急激な少子高齢化、医療スタッフの不足さらには一部の急性期病院への患者の集中等が進行しています。そして、コロナ禍でその問題点が露呈し、今もなお状態は改善するどころか、一層深刻になってきています。そうした現状を、在宅医療を専門とする者、そして往診医という立場から描かせていただきました。

「往診屋」というタイトルについて、少し説明させていただきます。私は、在宅医療の中で往診に力を入れています。医師が在宅で行う診療には2通りあります。1つは訪問診療といって定期的かつ計画的に行うものです。もう1つの往診は、患者さんや家族等の要請により患家に赴いて診療

するもので、急な病態の変化によることが多く、救急医療の要素が強くなります。また、終末期の患者さんの看取りの際にも往診することが増えます。

コロナ禍では、発熱や呼吸困難があっても医療機関を受診することが難しいケースが頻発し、往診依頼が急増しました。家族の見舞いができないため、入院治療を早期に止めて自宅で療養するケースも増え、これに伴い往診先も拡大しました。地域柄、私がこれまで診たことがない方であっても、普段診ている患者さんの家族や近所の方からの依頼等、もちろん状態にもよりますが、なるべく往診しています。

「屋」をつけるのは出版社の提案で、最初は抵抗がありました。しかし、水道が壊れたらその場に言って直す水道屋さん、冷蔵庫が故障したらその家に行って修理する電気屋さんの動き方と似た仕事をしていることを強調したく、このタイトルとさせていただきます。

改めて読み返してみると、本の中に表現が不十分なところが多々あり、気恥ずかしい思いです。関係者の方々に失礼な部分があれば、この場をお借りしてお詫びいたします。

最後になりましたが、この本が刊行できたのも、私がこの仕事を続けているのも、すべて青藍会の皆様をはじめ、関係者の方々のご指導、ご支援のお陰です。いつも救急搬送等に対応していただいている吉野川医療センターはじめ基幹病院の先生方には心から感謝いたします。今後もご迷惑をおかけしますが、ご指導賜りますよう、何卒よろしく願いいたします。

往診の様子について動画にまとめてみました。もしよろしければ御覧ください。

<https://youtu.be/ejLVEAkictE>

徳島大学の動き

徳島大学大学院医歯薬学研究部退任教授挨拶

教授退任にあたって

生化学分野

佐々木 卓也

先日、NHKの『新プロジェクトX』で明石海峡大橋が取り上げられました。故・原口忠次郎神戸市長が戦後復興を果たした昭和50年、「今こそ神戸と四国を橋で結び、陸続きにすべきだ」と訴えたことから、壮大な物語が始まりました。その提案には、四国の交通網整備による生活向上と、神戸（関西）の発展は四国との連携なくしては成し得ないという強い信念が込められていました。当初は「白昼夢」と一蹴されたものの、市長は「人生、夢なくしては叶いません」と語り、その夢は見事に実現しました。

私が医師として歩み始め、大学院で研究を始めたころ、明石海峡大橋の工事を舞子の自宅から毎日目にしていました。その大橋が開通した1998年、私はその橋を渡り、2000年に徳島大学に着任しました。着任以来、徳島大学が四国のみならず、関西、日本、そして世界において果たすべき役割を常に考えてきました。四国と関西の連携は互いの発展に欠かせない要素ですが、徳島大学はその独自の立場を守りつつ、地域を超えた視野で発展を続けるべきだと考えております。

その思いは、サイエンスにおいても、大学の運営においても、まだ道半ばではありますが、後に続く先生方がきっとそれを実現してくださることと信じております。長年にわたり皆様からご支援、ご指導を賜り、深く感謝申し上げます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。





徳島大学大学院医歯薬学研究部
実践地域診療・医科学分野特任教授
中村 信元 (なかむら しんげん)
昭和53年2月25日生

略 歴

平成14年5月	徳島大学病院第一内科研修医
平成15年6月	健康保険鳴門病院内科
平成19年4月	徳島大学病院血液内科
平成21年4月	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部生体情報内科学大学院生
平成23年4月	徳島大学病院血液内科特任助教
平成28年4月	徳島大学大学院医歯薬学研究部血液・内分泌代謝内科学助教
令和2年4月	徳島大学大学院医歯薬学研究部実践地域診療・医科学分野特任講師
令和3年10月	徳島大学大学院医歯薬学研究部実践地域診療・医科学分野特任准教授
令和6年4月	徳島大学大学院医歯薬学研究部実践地域診療・医科学分野特任教授 (現在に至る)

特任教授就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部実践地域診療・医科学分野
特任教授 中村 信元 (医学部48期)

令和6年4月1日付けで徳島大学大学院医歯薬学研究部実践地域診療・医科学分野の特任教授を拝命いたしました。この場をお借りしまして青藍会会員の先生方に謹んでご挨拶申し上げます。私は徳島出身で平成14年に徳島大学を卒業後、当時の第一内科に入局して徳島大学および関連医療機関にて勤務し、血液内科での全身化学療法を中心とした診療の傍ら、基礎研究や臓器横断的な診療・思考が必要とされる感染症診療の研鑽等を行ってきました。2020年からは、徳島大学および阿南医療センターにて血液専門診療、凝固異常などの希少疾患の診療、総合的な診療、臨床研究の指導等を実践しております。

微力ではございますが、血液・内分泌代謝内科学分野と連携して診療活動を行うとともに、阿南市および徳島県南部において医学生・研修医および専門的診療能力を有する医師の育成を行い、血液疾患を中心に病態解明および治療に関する研究に尽力してまいり所存であります。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。最後に、青藍会の益々のご発展をお祈り申し上げ、就任のご挨拶とさせていただきます。



徳島大学大学院医歯薬学研究部
先端脳機能研究開発分野特任教授
森 垣 龍 馬 (もりがき りょうま)
昭和48年1月18日生

略 歴

平成9年3月	慶応義塾大学理工学部機械工学科メカニカルエンジニアリングコース卒業
平成15年3月	徳島大学医学部科学科卒業
平成15年4月	徳島大学医学部附属病院医員（脳神経外科）
平成15年10月	高知赤十字病院医員（脳神経外科）
平成16年10月	独立行政法人国立病院機構国立高知病院医員（脳神経外科）
平成17年10月	徳島大学医学部附属病院医員（救急集中治療部）
平成18年4月	徳島大学医学部附属病院医員（脳神経外科）
平成19年4月	倚山会 田岡病院医員（脳神経外科）
平成20年4月	独立行政法人国立病院機構香川小児病院医員（脳神経外科）
平成21年4月	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部特任助教（脳神経外科）
平成25年4月	徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部特任助教（先端運動障害治療医学分野）
平成27年4月	徳島大学大学院医歯薬学研究部助教（脳神経外科）
平成29年12月	McGovern Institute of Brain Research, Massachusetts Institute of Technology (JSPS 派遣客員研究員)
令和2年6月	徳島大学大学院医歯薬学研究部特任准教授（先端脳機能研究開発分野）
令和6年6月	同特任教授 (現在に至る)

特任教授就任のご挨拶

徳島大学大学院医歯薬学研究部先端脳機能研究開発分野
特任教授 森 垣 龍 馬 (医学部49期)

令和6年6月1日付けで徳島大学大学院医歯薬学研究部先端脳機能研究開発分野の特任教授を拝命致しました。青藍会の先生方に謹んでご挨拶申し上げます。私は平成15年に徳島大学を卒業後、徳島で頑張ろうと心に決め、脳神経外科学教室に入局しました。工学部出身である自分のバックグラウンドを生かし、不随意運動症を対象とした脳深部刺激療法という脳と機械を繋ぐ治療とその研究に邁進してきました。令和2年には徳島大学医学部初の産学連携講座として、ビューティーライフ株式会社との本共同研究講座の設立に尽力致しました。不随意運動症の診療・研究・教育に加え、医工連携や産学連携を推進し、徳島大学の新たな魅力創出と発展に貢献できるよう最大限努力してまいり所存であります。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。青藍会の益々のご発展を祈念し、就任のご挨拶とさせていただきます。

徳島大学病院新任教授紹介



徳島大学病院
病院情報センター教授
若田好史 (わかた よしふみ)
昭和46年5月10日生

略歴

平成9年3月	徳島大学医学部医学科卒業
平成9年4月	徳島大学医学部附属病院小児科医員
平成10年4月	高松赤十字病院小児科医師
平成12年4月	国立高知病院（現 国立病院機構高知病院）小児科医師
平成15年4月	ひのみね整肢医療センター小児科医師
平成16年9月	徳島県立中央病院小児科医長
平成21年4月	九州大学病院メディカル・インフォメーションセンター医員
平成25年6月	九州大学病院メディカル・インフォメーションセンター助教
平成30年8月	徳島大学病院病院情報センター准教授
令和3年10月	独立行政法人国立病院機構九州医療センター医療情報システム管理部長
令和6年7月	徳島大学病院病院情報センター教授 (現在に至る)

就任のご挨拶

徳島大学病院病院情報センター
教授 若田好史 (医学部43期)

令和6年7月1日付で徳島大学病院，病院情報センター教授を拝命いたしました。青藍会の諸先生に，謹んでご挨拶申し上げます。

私は平成9年に徳島大学医学部医学科を卒業し，小児科学教室に入局いたしました。関連病院で小児科臨床医としての研鑽を積んだ後，平成18年に九州大学大学院医学研究院，社会医学分野へ進みました。修了後，九州大学病院，徳島大学病院でデータサイエンス関連業務に，令和3年からは国立病院機構九州医療センターの情報システム責任者として医療情報関連業務に従事して参りました。

近年，医学，医療分野におけるIT化は目覚ましく，電子カルテを中心とした病院情報システムは診療をはじめ病院運営に欠くことのできない要素となっています。また業務以外にも臨床研究などへの医療情報二次利用についてのニーズも高まっており，これまでの経験を生かして徳島大学病院のDXの推進，情報リテラシーの向上に努めて参る所存です。

また病院のみならず徳島大学や徳島県の臨床，研究両面で医療DX化に尽力できればと思っております。今後も青藍会の諸先輩のご指導，ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

最後に青藍会の益々のご発展をお祈り申し上げ，就任のご挨拶とさせていただきます。

留 学 記

南 碧 乃 興 津 勇 紀
岡 久 凜 香 前 川 勇 輔
岡 野 夏 奈

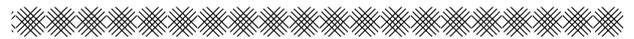
ドイツでの留学を通して

南 碧 乃 (医学科6年)

はじめまして。医学部医学科6年の南碧乃と申します。私は今年の4月から1ヶ月間、ドイツのハノーバー医科大学病院の外傷外科で実習をさせていただきました。私にとっては、初めてのヨーロッパで、初めて1ヶ月海外で過ごすという、初めてだらけの経験でした。今回の留学に申し込んだ理由としては、私は将来的に海外での臨床研修を考えており、学生のうちから海外の医療を実際に見れることや、英語でコミュニケーションを取る機会を作ることは、自分にとって良い経験になると考えたからです。外傷外科は、幅広い年齢層の患者さんが来られ、全身の疾患を経験できると考えたため選びました。

実習の1日のスケジュールとしては、まず朝から病棟回診とカンファレンスがあり、終わり次第手術か救急外来を見学し、夕方のカンファレンスに参加する、という流れでした。カンファレンスや回診、外来ではドイツ語が基本でしたが、ハノーバー医科大学の学生さんや先生方が英語で再度説明くださり、患者さんの疾患や状態、今どういう治療をしているのかを画像など使いつつ丁寧に説明してくださいました。また学生さんのFASTの授業に参加させていただいた際には、実際にお互いの体にエコーを当て合って、手技を確認したり練習したりしました。

最初は英語に苦勞し、先生方の説明が分からなかったり、質問して先生が答えてくださっても理解できなかったりし、とても悔しかったです。ですがもう一度聞き返したり、先生が何か提案されてそれが何か分からなくても、「やりたいです」「見たいです」と言うように心がけているうちに、段々分かるようになっていきました。最初からコミュニケーションが上手に取れていれば、学べたことがもっとあったかと思うと今でも非常に悔しいですが、海外でのコミュニケーションとしての英語の重要性を改めて



強く実感しました。また、やはり自分の英語力がまだまだ不十分であり、英語でのコミュニケーションを更に円滑にできるよう勉強する必要があると課題を再確認することもできました。

実習後は、同じ寮で生活している留学生たちと一緒にご飯を作ったり食べたりする機会が偶然何度かあり、自分たちの国の医療や文化、おすすめの観光地、料理など紹介し合ったり、ゲームをしたりして交流を深めることができました。土日はハノーバーを観光したり、学生さんたちにドイツの他の地域を案内してもらったりして、ドイツの文化や伝統も知ることができました。

他にもドイツの医療制度について教えていただくことができ、比較することで日本の医療の良い点や悪い点を考えさせられる機会になりました。

また何よりも、言葉や文化が全く違う環境で、学生として医療に関わることができたことは非常に刺激的で貴重な経験となりました。もしも今、ちょっと海外に興味があるけれど、英語を壁に思っている方がいれば、英語が苦手でも何とかできるので、気軽に留学を目指してみてください。

最後になりましたが、このような貴重な経験をさせていただき、様々なご支援をくださいました関係者の皆様に御礼申し上げます。この経験を活かし、今後も勉学に励みたいと思います。誠にありがとうございました。



ドクターヘリの見学

ハノーファー留学記

興津 勇 紀 (医学科5年)

ドイツは日本とよく似た国だと長い間思っていました。類似した国民性のほかに、医療の分野ではドイツの色が日本で強く残っています。それもそのはずで、日本は明治初期にドイツから医学を学び、戦後もドイツの医療保険制度や介護保険制度を参考にしてきた歴史があります。こうした背景があり、私もこの「お手本」であるドイツで学びたいという情熱が、今回のハノーファー医科大学留学を実現させました。

しかし、ドイツの魅力はそれだけに留まりませんでした。実際にドイツに足を踏み入れてみると、驚くことに、私の想像していた姿とは大きく異なっていました。ここ十年の間に、ドイツ社会は著しく多様化が進み、私が感じたドイツは、想像をはるかに超えるものだったのです。この多様性は、私にとって多くの新しい経験や学びに触れる絶好の機会となりました。行ってみないとわからないことがある。これらを現地で、肌で感じる瞬間も、留学の醍醐味なのかもしれません。

多様性がもたらす新たな道

ドイツは、EU 諸国からの移民に加え、シリア、アフガニスタン、ウクライナといった国々から多くの難民移民を受け入れています。私が留学した形成外科では、24人のうち9人の医師が外国にルーツを持っています。看護師やその他のコメディカルスタッフにおいては、その割合はさらに高く、ドイツの医療は移民に大きく依存していると言えるでしょう。その多くは、新しい言語を学び、厳しい試験に合格してここで活躍しています。彼らは特に向上心に満ちた優秀で努力家の人々であり、そんな彼らとチームを組むことで、私自身も大いに刺激を受けました。さらに、異なる文化や価値観を持つ人々との対話はとても興味深く、自分の中の固定観念をしばし解き放ってくれます。こうして得られる新たな視点は、未知の世界への扉を開いてくれます。

国際的なネットワークの下で得た最先端の学び

ハノーファー医科大学は、この多様性を背景に、最先端の知見に基づいた国際的なネットワークを築いています。特に印象に残っているのは、幸運にも、私が形成外科の50周年記念イベントに参加したときです。この場では、ハノーファーから世界へと羽ばたいた医師たちや、国際共同研究を行っている名だたる大学の研究者たちが集まり、それぞれの国で培われた知識や経験を共有し合っていました。異なる背景を持つ医師たちが協力し合い、最新の研究成果や治療法を世界的に展開していく。こうしたグローバルな最前線に触れることができたのは、非常に貴重な体験でした。

巨人の肩に登って

異なる国や文化に飛び込むことには、当然ながら不安や困難が伴います。しかし、そうした経験こそが自己成長を促し、これまで持っていなかった新たな視点を与えてくれる貴重な機会となります。そして何より、留学を通して築かれる国際的な繋がりや、多様な価値観に触れることは、将来にわたってかけがえのない財産となるでしょう。

留学を考えている皆さんへ。徳島大学とハノーファー医科大学の間には、すでに15年にわたる交流という名の「巨人」が立っています。先輩たちが築いたこの強固な基盤は、今、私たちがその肩を借りて、さらに遠くを見渡すための大きなチャンスを与えてくれています。この巨人の肩に立ち、未知の世界へ一歩を踏み出してみませんか。

私自身も、その肩を借りて想像をはるかに超える新たな景色を見ることができました。



形成外科学ORにて (左側が筆者)

ヒューストンで学んだ2ヶ月間

岡久凜香（医学科4年）

初めまして。医学科4年の岡久凜香と申します。この度、2024年6月より2ヶ月間、アメリカ合衆国テキサス州ヒューストンにあるUTHealth Houston McGovern Medical SchoolのSummer Research Programに参加させていただきました。テキサス大学と徳島大学の協定のおかげで貴重な経験をたくさんすることができ、大変感謝しております。この留学記では研究室での活動、日本人との交流や病院見学、そしてシェアハウスでの生活の3点についてご報告させていただきたいと思います。

プログラムでは、私はDepartment of Integrative Biology and PharmacologyのDr. Lee, Dung-Fangの研究室にお世話になりました。がんの病理メカニズムの解明に関して、リ・フラウメニ症候群に関する研究を行っているグループに配属され、RT-qPCRやWestern Blottingをはじめとする10以上の実験手技を学ばせていただきました。最初の頃は慣れない英語に苦労しましたが、プロジェクトメンバーの先生方が研究について詳しく説明し、私の拙い質問にもたくさん答えてくださったおかげで、研究の背景から実験に至るまでについても深く学ぶことができました。7週目のラボミーティングでは2ヶ月間で行った実験内容とその成果について30分間プレゼンする機会もいただき、自分にとっては大きなチャレンジでしたがなんとか無事やり切りました。2ヶ月という短い期間ではありましたが、どのように研究が行われているのかを実際に経験することで、世界の最先端の一つであるアメリカにおける基礎研究の世界を多少なりとも知ることができたのではないかと思います。

また、滞在中は現地の日本人の方々にも大変お世話になりました。過去に留学していた先輩方のおかげで、何かあった時に頼れる方々がいらっしゃり、本当に心強かったです。平日の夕方や休日には、日本人医師の先生方にお話を伺い、病院の中を見学させていただく機会を複数回いただき

ました。日本とアメリカの臨床現場の違い、アメリカで臨床医として働くとはどういうことか、など貴重なお話をたくさんお聞きし、またMD Anderson Cancer Centerなどの大病院の中を実際に見学することで、将来に向けての大きな刺激となりました。さらに、現地の日本人研究者の集まりにも参加させていただき、アメリカで研究者として働くリアルな話をお聞きし大変勉強になりました。

滞在先にはシェアハウスを選択しました。留学前はうまくやっていけるかとても不安でしたが、素敵なルームメイトに恵まれ充実した日々を過ごすことができました。彼女たちはパキスタン・トルコ・イタリア・エジプト出身と非常に多国籍で、アメリカに集まる人の多様性を改めて実感しました。共同生活の中で文化や考え方の違いを体感するのは、とても刺激的で楽しかったです。年齢や専攻が近く、休日に一緒に様々なところへ出かけたり、お互いの将来について部屋で語り合ったり、ハリケーンによる6日間の停電を励まし合って乗り切ったりと、かけがえのない思い出もたくさんできました。

この2ヶ月間でこのようにたくさんのことを学び、実り多き留学となりました。ヒューストンで得た経験を生かして、これからも多くのことにチャレンジするとともに、自分に合ったキャリアを模索していきたいと思います。最後になりましたが、貴重な留学の機会を与えてくださり、お世話になった多くの皆様に心より感謝申し上げます。



研究室の先生方と

ヒューストンで学ぶ アカデミアの在り方

前川 勇 輔 (医学科4年)

医学部医学科4年の前川勇輔と申します。この度は、2024年6月から8週間行われた、テキサス州ヒューストンでの University of Texas Houston McGovern Medical School による Summer Research Program に参加いたしました。ヒューストンでの滞在において学んだことを報告させていただきます。

自分は脳神経外科分野の Dr. Hui Wen Lo という方の研究室で、乳がんの脳転移に関する研究に参加させていただきました。参加当初は研究室の一員として参加するという意識が足らず、受け入れてくださった研究室の方々が「学生さん」である自分に教育してくれるからそれに応えればよいと考えている部分がありました。そのため、どうしてもっと丁寧に指導してくれないのだろうか、もっと自分に色々なことを積極的に教えてくれてもいいのではないかと感じることもありましたが、しかし、その考えが非常に未熟で甘えていたことに気づき、あくまで一人の研究員としてこのラボに参加するという意識を持って臨むようにしました。そうして初めて、調べて考えてもわからないことを相談すれば、ただ答えを教えるのみならずどうしてそう考えたかを言ってそれが正しいかどうかを評価して下さったり、実験を見学したいといえれば行っている一つ一つの作業を解説して下さったりと、非常に教育熱心で好意的な研究室であると気づくことができました。

自分は知識も技能も圧倒的に不足していましたが、それでも研究に必要なプロセスの一部を自分にまかせていただき、結果を出して研究室の利益に貢献するため、ただ指示を待ち言われたことをこなすだけではなく、自分がやるべきことを自分の力で考えて達成するという姿勢を育むことができました。最終的には論文の figure として使われるデータも得ることができ、非常に達成感を感じました。

また、定時直前でやるべき仕事

を終えてしまっている時やミーティングまでの移動、昼休憩の際など、研究活動を行わないオフの時間では非常に雰囲気がよく、雑談をしたりして明るく楽しい時間を過ごすことができました。その際、研究室内で同様のプログラムに参加した人たちと仲良くなり、土日やプログラム終了後には何度か遊びに連れて行ってくれました。そこでは、アメリカやテキサス特有の体験や有名なスポット・食事を満喫し、また互いの将来や境遇について話すことができました。とても楽しめたとともに、自分も今後のキャリアに真剣に向き合って努力していかなければならないなど感じ、非常にいい刺激となりました。

自分の滞在先については、シェアハウスであり、メディカルセンターと呼ばれる巨大な医療機関の集まりがある地域に非常に近いこともあってか、ルームメイトは医学部を卒業し病院見学を行っている人や自分と同様に学部生で病院見学に来ている人、母国で医学部を卒業後テキサスで研究活動に従事している人などでした。中には USMLE (アメリカ合衆国での医師国家試験) の取得のためシェアハウス内でも熱心に勉強しているルームメイトも数人おり、自分の目指す将来を明確に持っておりその実現のためにここにいるのだということを感じました。

最後になりますが、このような素晴らしい機会を与えて下さった西岡安彦医学部長、村澤普恵国際コーディネーターをはじめ、留学の実現に関わって下さった皆様に厚く御礼申し上げます。



ラボで仲良くなった友人と

留学体験記（サンパウロ大学）

岡野夏奈（医学科4年）

2024年7月に、約2週間ブラジルのサンパウロ大学医学部の Winter Schools に短期留学させていただきました。いくつかのコースがある中で、私は「Acute Care Trauma Surgery」コースに所属し、各国から集まった医学生とともに実習を行いました。大学病院の敷地は広大で、私たちのチームは主にICU、ER、OR（手術室）を見学し、実際に先生方が治療にあたられている患者さんの症例について議論やレクチャーを受けました。

毎朝8時からレクチャーが始まり、夕方5時まで外科部門の Robert 教授らがつきっきりで教えてくださいました。日本では見られない、警察と撃ち合いになり銃創を負った患者さんや、珍しい感染症など、ブラジルならではの症例を多く学ぶことができました。先生方の教育への熱意は素晴らしく、初日にはドクターヘリを実際に見学し、剖検や病棟でのディスカッション、手術の見学、ICUでの患者さんの管理方法のレクチャーなど、毎日が新しい知識にあふれ、退屈する暇もありませんでした。

クラスメイトは各国から集まった医学生で、授業中は真剣に取り組み、疑問点はすぐに質問し、ディスカッションでは臆せず自分の意見を述べる姿に感化されました。特に驚いたのは、南米の他国から来た学生たちが、私よりも学年が下であるにもかかわらずCTの読影を自分ででき、知識量も豊富だったことです。英語の授業について行くだけで必死な自分に悔しい思いを抱き、もっと知識をつけ、それをアウトプットできるよう努力しようと心に決めたことを、今でも鮮明に覚えています。初日は内容を理解するだけで精一杯でしたが、日を重ねるにつれて次第に慣れてきて、私も思ったことがあれば積極的に発言するようになりました。

ブラジル渡航前は、治安面についての心配や、日本からの距離が

あまりにも遠いこと、黄熱病ワクチンなどの特殊な予防接種の必要性など、不安な要素が多かったのですが、実際に行ってみると、日本人移民が多く住んでいる点や、ブラジルの人々が基本的にフレンドリーで優しいことから、非常に居心地が良く、百聞は一見にしかずだと実感しました。

放課後は、学生みんなでスーパーに買い出しに行き、各国の郷土料理を日替わりで作ったり、パーティーに出かけたりしました。週末にはサンパウロ郊外のビーチに20人ほどで遠足をしたりと、遊びも大充実していました。個人的には、日本人街でラーメンを食べに行った際に、どの味を注文すべきかとみんなが無邪気に私に聞いてきたことが印象に残っています。それ以来、食事の際はみんなで「いただきます」と合掌するようになったことは、今でも宝物のような思い出です。

様々な国籍の人々と出会ったことで、将来海外で働くことへのモチベーションがさらに高まりました。また、世界中の人々の健康に貢献できる医師になりたいという思いが、より強くなりました。最後に、今回の留学を支えてくださった徳島大学関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。



プログラム最終日 各国の医学生と共に

第76回西日本医科学生 総合体育大会の結果

- | | | | | | |
|--------|------|----|--------|------|-----|
| ○水上競技部 | 女子個人 | 優勝 | ○ゴルフ部 | 女子個人 | 優勝 |
| ○弓道部 | 女子個人 | 優勝 | ○ゴルフ部 | 女子団体 | 準優勝 |
| ○陸上競技部 | 男子個人 | 優勝 | ○軟式庭球部 | 女子ペア | 準優勝 |
| ○陸上競技部 | 女子個人 | 優勝 | | | |

2024年度第76回西日本医科学生 総合体育大会 水泳部 優勝

徳島大学医学部水上競技部

富岡 優 (医学科3年)

第76回西日本医科学生総合体育大会の水泳の部は、広島県福山市福山通運ローズアリーナにて、8月16日から8月18日にかけて、川崎医科大学の運営のもと開催されました。以下、今大会で入賞した選手を報告させていただきます。

- | | | |
|---------------|----|-----------|
| 女子 200m個人メドレー | 優勝 | 吉田 恵 (1年) |
| 100m背泳ぎ | 優勝 | 三久翠子 (2年) |
| 50m背泳ぎ | 優勝 | 三久翠子 (2年) |
| 100m背泳ぎ | 6位 | 小谷侑愛 (4年) |

- | | | |
|------------|----|-----------|
| 50m背泳ぎ | 4位 | 小谷侑愛 (4年) |
| 女子総合 | 7位 | |
| 男子 100m平泳ぎ | 3位 | 富岡 優 (3年) |

今年度の大会は、4年ぶりに開催された昨年度の大会と比べ、どの種目もレベルの上がったものとなりました。その中で、昨年を上回る好成績を収めることができたのは、それぞれの選手が練習の成果を存分に発揮できたからであると思います。特に、女子は出場選手が3人のみでかつ、リレー種目は個人種目の2倍の得点であるのにも関わらず、個人種目の得点のみで総合7位に入賞できたことは大変な快挙でした。来年度、鹿児島で行われる西医体では今年以上の結果を残し、水泳部をさらに盛り上げていきたいです。今後とも応援よろしくお願い致します。



第76回西医体を終えて

徳島大学医学部弓道部主将

青野大樹（医学科4年）

こんにちは、令和5年8月から1年間主将を務めました青野大樹と申します。

8月10日・11日・12日に岡山県のジップアリーナ岡山で開催された第76回西日本医科学生総合体育大会にて、以下の成績を残しましたのでご報告させていただきます。

男子団体戦 第4位

女子個人戦優勝 西岡朋可

男子優秀射技賞 平野和樹

前回大会に続き、今回も団体戦・個人戦ともに優秀な成績を残せたことを大変嬉しく思います。

西医体以外にもいくつかの大会に参加してきましたが、やはり西医体の雰囲気は他とは一線を画しており当日は緊張感が張り詰めていました。そうした状況で部員一人ひとりがこれまでの練習を信じて本来の実力を出し切れるよう集中して試合に臨みました。そして試合が始まり、活躍し成長した姿を見

せてくれた後輩たち、入部してからともに歩んできた同期の雄姿、美しい射形で見ている人にも緊張感を伝えるような弓を引く先輩方、このような様子を見て深く感動を覚えました。そんな中で結果を残せた選手、惜しくも残せなかった選手は必ず出てきてしまいますが、いずれにしても貴重な経験になったことは間違いなく感じています。この経験を糧にしてこの医学部弓道部がより成長していくことを心から期待しています。

また昨年度の全日本医科学生体育大会王座決定戦の団体戦にて優勝しましたので、10月5日・6日に開催される今年度の大会にも参加することができます。連覇を目指して、より気を引き締めて頑張ってまいります。

最後に、これまで弓道部が活動できておりますのは弓道部部長の秦広樹教授、日ごろより熱心にご指導くださる森師範、応援して下さった多くのOBの先生方、そして関係者の皆様のお力添えがあったからこそです。これからも部員一同、ますます精進してまいりますので、ぜひ応援のほどよろしく願いいたします。



第76回西日本医科学生総合体育大会の結果

第76回西医体を終えて

徳島大学医学部陸上競技部主将

山本大心(医学科3年)

皆様、はじめまして。徳島大学蔵本陸上競技部主将の山本大心と申します。第76回西日本医科学生総合体育大会は岡山県で開催され、蔵本陸上競技部からは4名の選手が出場しました。以下にその結果をご報告させていただきます。

女子100m	2位	松岡久碧子(医学科5年)
女子200m	1位	松岡久碧子
女子400m	1位	松岡久碧子
男子やり投げ	1位	岡本 爽楽(医学科3年)
男子走り幅跳び	4位	山本 大心(医学科3年)
男子走り幅跳び	3位	金子 傑(医学科2年)
男子フィールド	総合3位	

今年度の西医体陸上競技部門は、気温36度を超える灼熱の中、2日間の日程で行われました。そのような厳しい気温環境の中、多くの選手が自己ベスト

を出せたこと、そして大きな怪我もなく大会を終えられたことを、主将として大変うれしく思います。また、今大会では、出場した全員が入賞を達成することができただけでなく、団体戦においても、男子フィールド総合3位、女子トラック総合5位という成績を残すことができました。これまで取り組んできた練習は間違っていなかったと、安堵と喜びを感じることができました。しかしその一方で、団体戦において1位を取れなかった悔しさも痛烈に感じました。

2日間の緊張感に満ちた試合を通して、これから自己ベストを更新していくためにそれぞれが何をすべきか、その答えが明確になりました。今後も懸命に練習に励み、来年こそは、悲願であるフィールド総合優勝を達成したいと思います。

さて、西医体は終了しましたが、関西医歯薬、中四国個人戦と、我々の陸上生活は続いていきます。西医体を通して感じた喜びや悔しさを糧に、これからも歩みを止めず、一步一步成長してまいりたいと思います。今後も変わらぬご支援、ご指導をいただけますと幸いです。最後になりますが、このような結果報告の機会を設けていただいたこと、深く感謝いたします。



西医体出場選手

左から、金子傑、山本大心、岡本爽楽、松岡久碧子

第76回西日本医科学生総合体育大会の結果

第76回西日本医科学生総合体育大会
ゴルフ(女子)競技部門 団体準優勝

徳島大学医学部ゴルフ部主将

柳坂圭祐(医学科4年)

令和5年8月から1年間ゴルフ部主将を務めさせて
いただきました柳坂圭祐と申します。

はじめに、これまでゴルフ部が充実した環境で
日々の練習に取り組めておりますのは、ゴルフ部部
長の橋本一郎教授、長年ご指導頂いている佃一生
監督をはじめ、青藍会の多くの先生方やゴルフ部
OB・OGの先生方からのご指導とご支援の賜物と
存じます。この場をお借りして心から感謝申し上げ
ます。

この度の第76回西日本医科学生総合体育大会ゴルフ
(女子)部門は、倉敷カントリー倶楽部(岡山県)
にて、令和6年8月8日、9日の日程で開催されま
した。以下、本大会の結果をご報告させていただきます。

女子団体 準優勝(22大学中)

女子個人 優勝 森田彩夏(88選手中)

最後になりますが、改めましてこのような報告の
場を設けていただき感謝申し上げます。これからも
西医体をはじめとする大会で成績を残せるよう精進
して参ります。今後とも変わらぬ御厚情、御支援を
賜りますよう、何卒、宜しくお願い申し上げます。

利川杏菜(医学科6年)

昨年の団体優勝に引き続き、今年の西医体でも団
体準優勝という結果を残すことができ、非常に嬉し
く思います。個人的には非常に悔いの残るプレーで
したが、後輩たちの力を存分に借りてこのような結
果を残すことができ、感謝の気持ちでいっぱいです。
部活を始めた当初はゴルフ自体にあまり興味がなく、
部活の練習でもあまり身が入らない時もあったので、
最終学年で西医体に出場するという選択を取るほど
自分が熱中できるとは思いませんでした。この
2年間の結果を踏まえ、最後まで部活を続けてきて
本当に良かったと思えました。応援してくださりあ
りがとうございました。



西医体ゴルフ女子団体戦メンバー
左から 5年 廣瀬奈巳 6年 利川杏菜 3年 森田彩夏
2年 竹内百佳は用事のため表彰式欠席

第76回西日本医科学生総合体育大会の結果

廣瀬 奈巳 (医学科5年)

私自身初めての西医体で、緊張していましたが、チームに少しでも貢献できるように練習に励みました。惜しくも1位の大学とは数打差で負けてしまいましたが、このメンバーで準優勝という形で入賞することができて、とても嬉しく思います。そして何よりとてもいい経験をさせていただけて、他のメンバーには感謝しかありません。また応援して下さいましたみなさんにも本当に感謝しています。ありがとうございました。これからも日々練習に励んでいきたいと思っています。

森田 彩夏 (医学科3年)

今年も西医体に出場させていただき、団体2位という結果を残せたことは、ゴルフ部として大変嬉しいことだと思っています。しかし個人のスコアとしては全く満足のいくものではなく、とても悔しいです。まだまだ実力が不足していると強く感じました。来年は自分も満足のいく成績が残せるよう、日々練習を重ねていきます。一緒に出場してくれたメンバー、そして応援してくれた沢山の方々、本当にありがとうございました。

竹内 百佳 (医学科2年)

今年度も昨年度に続き、西医体に出場出来たことを大変嬉しく思います。6回生である杏菜さんは最後の試合であり、このメンバーで出場できるのは最後ということもあり、ベストスコアが出せるように努力しましたがそれは叶いませんでした。しかし倉敷カントリー倶楽部という歴史のあり設備が整ったコースでゴルフができ、また他大学の選手と交流でき、いい経験になりとても刺激になりました。

優勝はできませんでしたが準優勝という結果を残すことができ、これは先輩方の素晴らしいスコアが導いたものだと感じております。今回の悔しさを糧にこれからも更に練習を続けていきたいと思っています。ありがとうございました。

第76回西日本医科学生 総合体育大会を終えて

林 優太郎 (医学科3年)

はじめに、軟式テニス部が日々練習に励み、活動できておりますのは顧問の森健治先生、OB会長の田村公一先生をはじめ、多くの先生方やOBOGの先輩方のご指導とご支援の賜物と存じます。この場をお借りして、心から感謝申し上げます。

第76回西日本医科学生総合体育大会軟式テニス部門は、岡山市浦安総合公園テニスコートにて、令和6年8月11日、12日、13日の日程で開催されました。以下に本大会の結果をご報告させていただきます。

男子個人戦ベスト8

西願・日野ペア、川西・三輪ペア

女子個人戦準優勝

宮内・浦田ペア

これまで我々後輩に様々な指導をしていただき本当にありがとうございました。先輩方に少しでも追いつけるよう部員一同精進して参ります。

吉川 和輝 (医学科2年)

今回西医体にて団体メンバーとして先輩方とともに出場させていただき、先輩方のお力添えやアドバイスのおかげで本番では自分の持てる力を存分に発揮できたと思います。団体戦では全医体まであと一歩というところでしたが先輩方の力を借りなければ切り抜けることができなかつた場面は幾度となくありました。個人戦でも先輩方の輝かしい功績は感動を与えてくれるとともに私たちへのエールにもなってくれました。先輩方に大きな憧れを持つとともに私の理想像として一層部員のやる気を掻き立ててくださいました。西医体はこのメンバーで経験できたことにほんとに実り多いものを感じています。

宮本 幹太 (医学科2年)

今回の西医体では、男子団体戦でベスト8、男子個人戦ではベスト8が2本、ベスト32が1本、女子個人戦では準優勝、と先輩方が素晴らしい結果を残してくださいました。また、全医体でも輝かしい戦績を残してくださいました。男子団体戦は、あと一勝で全医体出場という悔しい結果でもありましたが、部員全員が全力で戦う非常に貴重な経験ができました。どの試合でも、これまでの練習の成果を出し

第76回西日本医科学生総合体育大会の結果

切った、一球一球に魂のこもった素晴らしいプレーを見せていただきました。我々後輩も先輩方のようなプレーができるよう、日々の練習に励みたいと強く思い直した大会になりました。最後になりましたが、OBOGの先輩方におきましては、普段より厚いご支援をいただきありがとうございます。いい結果をご報告できるよう精進してまいりますので、ご支援のほどよろしく願いいたします。

船橋 光 (医学科2年)

岡山県で開催されました第76回西日本医科学生総合体育大会において先輩方が好成績を収められまし

た。私自身は団体メンバーとして出ることはなく個人戦のみの出場でしたが多くの医学生と交流することができとても刺激的な大会となりました。男子の団体メンバーは10人で構成されており、そのうち6人が6年生でした。この西医体はチームを支えてきた6年生の引退試合でもあるため普段の練習から熱意が伝わっていました。それもあり先輩らの大会当日の活躍と熱意は大学からテニスを始めた自分の励みになるものでした。これからも憧れの先輩のようにテニスに熱くそして強い選手になれるよう普段の練習から頑張っていきたいと思います。



西医体女子個人戦準優勝 宮内・浦田ペア

学生だより

本篇は、青藍会学生広報委員の天野利哉さん、小林由紀彦さんに企画していただきました。

青藍会学生広報委員企画

臨床への第一歩

青藍会学生広報委員

天野利哉（医学科3年）

この度、学生だよりの企画を担当させていただきました。医学科3年の天野利哉です。この場をお借りして、私たちが日々学んでいる大学での授業について少しお話しさせていただきます。

現在、3年生の学びも折り返し地点に差し掛かり、1年生から積み重ねてきた基礎医学の学習も終盤を迎えています。3年生になると、研究室への配属が始まり、より深い学びに触れる機会が増えました。その中で、さまざまな分野に対して興味や関心を抱くきっかけを得ています。

授業は朝8時半から始まることが多く、毎朝早起きは少し大変ですが、友人たちと一緒に教室で学ぶ時間は、医学に対する私の興味をさらに深めています。特に、グループディスカッションなどを通じて、知識を実践的に活用する機会が多くなり、自分自身の成長を感じる瞬間も増えてきました。

今年の12月からは、いよいよ臨床に関する講義がスタートします。これまで学んだ基礎医学の知識をしっかりと復習し、臨床講義に万全の状態で見学しよう、日々の学習に励んでいます。

私たち青藍会学生広報委員は、この学生だよりを通じて、在校生や卒業生の皆さまに徳島大学での学生生活や学びの様子をより深く知っていただけるよう、さまざまな情報をお届けしていきたいと思っています。ぜひ最後までご覧いただき、楽しんでいただければ幸いです。

大学の研究室配属を通じて

青藍会学生広報委員

小林由紀彦（医学科3年）

この度、学生代表としてこの重要な企画を任せていただきました。医学科3年の小林由紀彦と申します。私は、学生広報委員としての役割を通じて、普段の大学生活や研究室での経験について発信できることを非常に光栄に思っております。

まず初めに、医学科2年次における授業や学生生活について、簡潔にはありますが、振り返って述べさせていただきます。2年前期では、「基礎医学」という科目を中心に学びました。これは、1年次に学んだ一般教養科目とは全く異なり、より専門的な医学の知識を深める内容であり、医者を目指す私たちにとって、医療の本質に迫る貴重な経験となりました。学びを進める中で、自分が医者になるために努力しているのだという実感が、次第に強まってきました。そして、2年後期には、実際に解剖実習を受ける機会がありました。目の前に遺体がある状況で、座学だけでなく、実際に手を動かして学ぶという貴重な経験を通じて、医学の奥深さと重みを実感しました。

そして、いよいよ3年に進級し、大学の研究室に配属されることができました。3年生では、毎日の午前中に座学の講義を受ける一方、午後13時から研究室での活動が始まります。私は、疾患病理学という分野の研究室に配属されており、ここではさまざまな実験手法や関連する論文を学びながら、自分のテーマを決めて研究を進めることができます。この研究室での経験は、研究に進む医学生にとっては基礎となり、また臨床に進む医学生にとっては、専門医になるための論文発表の練習となります。

今後、4年、5年と進むにつれて、臨床実習や病院実習を通じて、より実践的な医療について学ぶこととなります。いよいよ、私たちが身近に感じる医者が行っている診断や治療に関する知識を深めてい

くことができ、将来的にはどの科に進むのかを決定する重要な時期がやってきます。これまで、教授方や先輩方、さまざまな方々に多大なサポートをいただいております、今の自分があるのはそのおかげです。医者になった際には、一人でも多くの命を助け、社会に貢献できるよう尽力していきたいと強く思っています。

最高のお祭り、阿波踊り

たけのこ連連長

豊 藏 太 一 (医学科4年)

まず初めに、たけのこ連活動にご協力いただきました先輩方やOB・OGの皆様、そして応援していただきました卒業生や学校関係者の皆様に、この場をお借りして感謝の意を表させていただきます。

自分は大阪出身で徳島大学に来て初めて阿波踊りという存在を意識しました。そして2年生の夏、本物の踊りを目の前にして圧倒され、徳島に来たからにはこの祭りにちょっとは関わってみたいとずっと思っていました。ただまさか、「連長」としての役目を受けるとは思ってもみませんでした。

祭りの期間中、徳島市内は阿波踊りの熱気と活気に包まれます。観客の皆さんが沿道に集まり、私たちの踊りを楽しみにしている姿を見ると、その期待に応えたいという気持ちが自然と湧き上がってきます。踊りが始まると、太鼓や笛の音に合わせて足を踏み鳴らし、手を振り上げる動きの一つ一つが、観客との一体感を生み出します。その瞬間、私は単なる踊り手としてではなく、徳島の文化を伝える一員であることを強く実感しました。

連長としての私の役目は、全体のリズムと動きを統率することです。踊り手たちの隊列を保ちつつ、踊りに込める情熱を観客に伝えることを心がけました。

また、連長としての役割を通じて学んだことの一つに、「協力の大切さ」があります。阿波踊りは個人の技術だけでなく、チーム全体の調和が求められる踊りです。個々の踊り手の動きが合わさり、一つの大きな流れを作り出すことで、初めて観客に感動を与えることができます。

この経験を通して、私は踊りの技術以上に、コミュニケーション能力やリーダーシップ、そして協力することの重要性を学びました。阿波踊りを通じて得たこれらの学びは、私の人生においても大切な教訓となるでしょう。



旋風巻き起こせ蔵本祭

久次米 太陽 (医学科3年)

本年は10月26日・27日に「第40回蔵本祭～巻き起こせ蔵本旋風～」が昨年度と同様、一般公開の形で開催されました。

今年のテーマである「巻き起こせ蔵本旋風」は昨年先輩方が起こした movement を蔵本生が巻き起こす旋風に乗せて未来へと届くようにと思いを込めて、このテーマを付けさせていただきました。実行委員長を務めた医学科3年の富江龍太郎さんは、「例年のような、各部活による模擬店や2日間に亘るステージ企画の他、今年は新たなチャレンジとして蔵本祭史上初の音楽アーティストの来場を実現することができました。無事に蔵本祭が挙行されよかったです。また、今年も地域の方々から「蔵本祭の開催を心待ちにしている」というような声をかけてくださっていたので、その期待に応えられ、そして昨年同様に今年もたくさんの来場者数を記録することができたので安心していきます。」と語ってくれました。

また、今年の学園祭の目玉はステージ企画、模擬店、そして芸能イベントでした。ステージ企画では、ダンスサークルによるダンスの披露や、蔵本軽音楽部による演奏、そして蔵本スターなどのイベントが大盛況でした。模擬店においても、各部活・サークルさんによる、焼きそば・唐揚げ・うどんなど多種多様な屋台が出店され、大きな盛り上がりを見せました。また、今年度は私たち蔵本祭実行委員会もチーズスティックの模擬店を出店させていただきました。私たち自身も模擬店を出すことで蔵本祭をより盛り上げることができるのではないかと考え、今年度の出店に至ったのですが、無事成功して良かったです。そして、なんといっても今年が目玉中の目玉は芸能

イベントでした。今年度の芸能イベントでは、人気4人組ロックバンドであるオレンジスパイニクラブ様をお招きしました。これは、蔵本祭史上初となる音楽アーティストの来場でした。音楽アーティストの来場を実現させる過程には、様々な困難がありましたが、我々蔵本祭実行委員会が知恵を出し合い、何とかその困難をクリアしました。素晴らしい演奏をしてくださった、オレンジスパイニクラブの皆様、ライブのチケットを購入し、ライブを盛り上げてくださった皆様、そして、会場内警備や片付けなどに協力してくださった皆様には感謝しかありません。本当にありがとうございました。

また、徳島の伝統芸能である阿波踊りの冒頭句には「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃ損々」という言葉があります。私は、蔵本祭が挙行される前から、蔵本祭への参加・来場を決めている人はもちろんのこと、参加を迷っている人たちも、せっかく徳島の地で大学生活を送るのですから、この言葉の意のように積極的に参加していただくことで、蔵本に関わる全ての人たちにとって最高の思い出となるような蔵本祭が開催されるのではないかと、考えていたのですが、皆様の積極的なご参加による最高の蔵本祭が開かれ大変嬉しく思います。

この原稿を書いている現在蔵本祭終了直後であり、まだ蔵本祭の余韻が冷めやらぬ中ですが、私たちが作り上げる蔵本祭がどのようなものになるのか期待と不安が入り混じった状態で過ごしたこの半年間の努力が報われたような気がしています。

また、最後にはなりますが、蔵本祭は地域の方々、広告費・寄付金を出して頂いた方々、そして蔵本キャンパスに関わる全ての方々の支えのもと開催することができました。

この場を借りて厚く御礼申し上げます。



青藍会の動き

教授就任のご挨拶



日本体育大学保健医療学部救急医療学科教授
増野智彦 (ますのともひこ)
昭和41年6月21日生

略歴

平成6年3月	徳島大学医学部医学科卒業
5月	日本医科大学救急医学教室入局 日本医科大学付属病院救命救急センター
平成7年1月	日本医科大学付属千葉北総病院救急部
9月	亀田総合病院外科
平成9年10月	川口市立医療センター救命救急センター
平成10年7月	日本医科大学付属病院高度救命救急センター
平成11年8月	総合会津中央病院救命救急センター
平成13年5月	Research Fellow Department of Surgery, Denver Health Medical Center / University of Colorado Health Sciences Center, U.S.A.
平成17年7月	Visiting Professor, Department of Surgery, Denver Health Medical Center / University of Colorado Health Sciences Center, U.S.A.
平成18年2月	日本医科大学付属病院高度救命救急センター助教
平成21年4月	日本医科大学付属病院高度救命救急センター講師
令和6年4月	日本体育大学保健医療学部救急医療学科教授 日本医科大学救急医学教室非常勤講師 (現在に至る)

就任のご挨拶

日本体育大学保健医療学部救急医療学科
教授 増野智彦 (医学部40期)

令和6年4月より、日本体育大学保健医療学部救急医療学科教授を拝命いたしました。私は平成6年に徳島大学を卒業後、日本医科大学救急医学教室に入局し、30年間にわたり救急医療の最前線で重症患者の治療および救命に従事してまいりました。この間、救急医療の技術は大きな進歩を遂げ、多くの劇的な救命症例にも接してきました。しかしながら、病院での治療のみでは救命に一定の限界があることも事実です。救急医療は、救急医療体制、病院前救急診療、そして病院内での救急治療がすべて最適に機能してこそ、重症患者の命を救うことができるという特徴があります。「救命の連鎖」という言葉が示すように、これらの要素のいずれかが欠ければ、救命には繋がりません。

この救命の連鎖をさらに強固にするため、本年4月より日本体育大学保健医療学部救急医療学科に籍を移し、救急救命士の育成に従事することにいたしました。令和3年の法律改正により、救急救命士が病院内でも活躍できるようになり、その職域が広がりつつあり、救急救命士への需要もますます高まっております。今後は、優れた救急救命士を輩出することで、救急医療のさらなる発展に寄与し、彼らが様々な場面で社会貢献できるよう努めてまいります。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



愛媛大学大学院医学系研究科
 先進消化器内視鏡開発学講座教授
 森 宏 仁 (もり ひろひと)
 昭和44年11月20日生

略 歴

- 平成8年4月 徳島大学医学部附属病院放射線医学科医員 (研修医)
- 平成9年4月 小松島赤十字病院放射線科
- 平成11年4月 国立善通寺病院内科・消化器科
- 平成13年4月 三豊総合病院内科・消化器科レジデント
- 平成19年2月 香川労災病院消化器内科部長
- 平成23年6月 香川大学医学部消化器・神経内科学講座講師
- 令和元年4月 香川大学医学部消化器・神経内科学地域医療連携医学講座客員教授
- 令和4年4月 聖マリアンナ医科大学消化器・肝臓内科学講座客員教授
 兼愛媛労災病院消化器センター長
- 令和6年4月 愛媛大学大学院医学系研究科先進消化器内視鏡開発学講座教授
 (現在に至る)

教授就任のご挨拶

愛媛大学大学院医学系研究科先進消化器内視鏡開発学講座
 教授 森 宏 仁 (医学部42期)

令和6年4月1日より愛媛大学大学院医学系研究科 先進消化器内視鏡開発学講座の教授を拝命いたしました医学部42期生の森宏仁と申します。青藍会の先生方に謹んでご挨拶申し上げます。

私は、1996年に徳島大学医学部を卒業後、主に徳島県、香川県、愛媛県を中心に放射線科で診断学・血管内治療学を学び、その後消化器内科および消化器外科を中心に研鑽を積んで参りました。2009年から香川大学医学部消化器・神経内科の講師として12年間、大学で教育・診療・研究を行って参りました。その後4年間、愛媛労災病院 消化器センター長として臨床に携わりながら、聖マリアンナ医科大学 消化器・肝臓内科の客員教授として研究と診療を継続・研鑽してまいりました。このたび、愛媛県に永住するとともに、本講座の教授を拝命いたしました。

本講座は、消化器内視鏡領域でのアイデア創出から特許化そして創薬・機器開発・製品化など、産学官・医工連携による横断的研究を基本理念とし、消化器領域の新規的・横断的な教育・診療・研究を行っております。

青藍会の先生方には、引き続きご指導・ご鞭撻を賜るとともに、青藍会のご発展を心より祈願し、就任のご挨拶とさせていただきます。

病院長就任のご挨拶

ご挨拶

国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター

前田 和 寿 (医学部34期)



令和6年4月1日より国立病院機構四国こどもとおとなの医療センター院長を拝命しました。私は香川県さぬき市出身、徳島大学を1988年に卒業後、関連病院勤務、大学病院で19年間勤務後、2013年7月に赴任してきました。

当院は、2013年に、善通寺病院と香川小児病院が統合した病院であります。統合により、成人と成育、重症心身障害児(者)に医療を提供できる複合型の病院であることが特徴となっています。成育部門では、香川県の小児救命救急センター、総合周産期母子医療センターとして、県民のみならず愛媛県東部、徳島県西部、高知県より幅広く3次救急を含む医療を提供しています。成人部門では、医療圏の中核病院として救急医療、脳卒中・循環器病センター、骨運動器センターなどを開設しています。また重症心身障害など、他の医療機関ではアプローチが困難な分野の医療も提供しています。

さて2024年は、「アフタコロナ時代」「医師の働き方改革」など深刻な問題が山積みとなっています。アフタコロナの現在、我々が提供できる医療、患者様が望む医療も少しずつ変化をしてくれています。今後は患者様のニーズに合わせた医療を提供することが求められます。また医師の働き方改革が本格的に導入される年でもあり、救急医療を行っている当院においては、早急な対応が求められています。

当院の理念である「私たちはあたたかいこころと思いやりを持っていつもみなさまと共にあゆみます」を胸に、職員一同、地域の住民、医療機関の皆様から信頼される病院としてたゆまぬ努力を重ねていく所存ですので、青藍会の皆様におかれましては、今後ともご支援、ご協力を賜りますようお願いいたします。



投稿規定

広報委員会

○ 原稿について

- 必ず、文頭にタイトル、氏名・卒業期をご記載ください。
例 タイトル ○○○○○○ 山田太郎 (医学部○期)
- 文字数は1,400字以内、写真（カラー）は1枚でお願いいたします。
なお、写真には見出しあるいは説明文を必ずつけてください。
- 英数字は半角文字で、カタカナは全角文字で入力してください。
- 原稿の文中に登場する氏名及び敬称については、スペースを入れずに記載してください。
(例 山田太郎君 高倉健さん 松下幸之助先生)

○ 原稿及び写真の送付について（青藍会事務局 seiran@tokushima-u.ac.jp）

- 原稿送付は、可能な限りメール添付または電子媒体にてお送りください。
プリントされた写真については、郵送にてお送りください。後日、返送いたします。
- 画像ファイルを送付される場合は、原稿とは別に、JPEG ファイル等でお送りください。
原稿（Word 等）に貼り付けますと、画質が悪くなります。
なお、画像ファイルの容量が大き過ぎますと届かないことがございます。容量を小さくして1枚ずつに分けてお送りください。また、青藍会事務局からの連絡がなかった場合は、届いていないことが考えられますので、再度確認のご連絡をお願いいたします。

○ 原稿の締め切り日を厳守願います（次号105号の締め切り日は令和7年3月28日（金）です）

会報の印刷および製本には、原稿をお預かりした後、ゲラ刷り作成、校正、修正、編集会議等で2ヶ月ほどの時間を必要といたします。

締め切り日より遅れた場合は、次号の掲載になりますので予めご了承ください。

○ 編集作業について

- お送りいただきました原稿は語句などに関して広報委員会で校閲させていただきます。その結果、修正をお願いする場合もございますことをご了承おきください。
- 用語や表記などの統一のために文章に手を入れることがございます。予めご了承ください。

○ 原稿校正について

- 広報委員会で会報全頁のレイアウト等を校正後、製本前のゲラ刷りを作成しお送りさせていただきますので、著者校正をお願いいたします。
- 校正時の大幅な追記、削除等は、会報発行期日に影響いたしますので、ご遠慮くださいますようよろしくお願い申し上げます。

編集後記

激動の2024年もあとわずか、このたび青藍会会報第104号が完成しました。ご協力いただきました先生方、学生の皆様に厚く御礼申し上げます。今号の巻頭言では同期の浦上先生に危機的な消化器外科の状況をお知らせいただきました。また、大日教授、池田教授、青藍会賞を受賞された佐藤准教授には学術講演抄録をご寄稿いただきました。いずれもたいへん興味深い内容で、日々探求と研鑽を積み重ねられている先生方のお姿を目の当たりにし感銘を受けました。支部だより、会員通信、数々の同窓会報告、渡部先生の書籍紹介なども楽しい内容になっています。徳島はもとより全国でご活躍されている先生方と同窓であることをたいへん誇らしく思います。

昨年から正会員となった学生の方々の留学記では、未知の世界に体当たりで飛び込む勇気、そして多国籍の友人たちと積極的に交流する力が大変印象的です。さらに、勉強だけでなく西医体、蔵本祭、阿波踊りなどにも全力で打ち込む若い力を頼もしく思い、彼らによるこれからの徳島大学の発展に期待が持たれます。

この編集後記を書いているちょうど2週間前に、私共33期生同窓会がありました。楽しい歓談の後、幹事の先生の「学生時代からこれまで、いろいろな場面で同級生のみんなに支えてもらって今がある。同級生はやっぱりええなあ」との言葉に全員が頷き、3年後の再会を約束してお開きとなったのでした。各支部会でも、また留学中の海外でも、青藍会会員同士の絆で助けられることも多々あるのではないかと思います。青藍会の輪は今後も徳島から日本全国そして全世界に広がり、私達を支えてくれると思います。これからも同会の発展にお力添えを賜りますよう心からお願い申し上げます。

原 田 和 代 (医学部33期)

編集 広報委員 橋本 一郎 (34期) 大塚 秀樹 (40期) 工藤美千代 (33期) 田中 克哉 (36期)
原田 和代 (33期) 板東 浩 (27期) 森岡 久尚 (45期)
学生広報委員 天野 利哉 (医学科3年) 小林由紀彦 (医学科3年)

非 売 品

青 藍 会 会 報 第 104 号

令和6年12月4日印刷

令和6年12月11日発行

発 行 徳島大学医学部医学科同窓会青藍会
〒770-8503 徳島市蔵本町3丁目18-15
電話 (088) 633-7109 (内線2601)
FAX (088) 633-3180 (青藍会事務室)
E-Mail seiran@tokushima-u.ac.jp
URL <https://www.seirankai-tokushima.jp/>
振替 01680-4-8671
ゆうちょ銀行 一六九店 (169)
当座 0008671 青藍会

発行者 青藍会会長 荒瀬 誠治

印刷所 グランド印刷株式会社

徳島市万代町6丁目20-15 電話 (088) 622-8448
